

一般社団法人日本生態学会

No.51

2020年5月

ニュースレター

選挙の郵送投票廃止について	1
第 68 回日本生態学会大会開催について	1
日本生態学会各賞候補者募集	2
追悼：中野繁氏を偲ぶ～バハカリフォルニア沖海難事故から 20 年～	6
第 67 回日本生態学会大会（名古屋）報告	10

記事

I. 一般社団法人日本生態学会 2020 年度定時総会、代議員会、各種委員会において 報告・承認・決議された事項	14
A. 報告事項	14
B. 審議事項	22
II. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について	27
III. 功労賞受賞者	27
IV. 書評依頼図書	27
V. 寄贈図書	27
書評	27
日本生態学会役員・代議員・委員一覧	31
京都大学生態学研究センターニュース	34

選挙の郵送投票廃止について

日本生態学会では役員選挙において 2011 年から従来の郵送投票とあわせて電子投票を導入してまいりましたが、最近 3 回（2015 年、2017 年、2019 年）の選挙では郵送投票の希望者がなかったため、次回選挙より郵送投票を廃止し電子投票のみとすることを 2020 年 3 月開催の ESJ67（名古屋）総会にてご提案いたしました。

郵送投票廃止についてご意見がありましたら、2020 年 11 月 30 日（月）までに日本生態学会事務局まで郵送・E-mail または Fax にてお知らせください。

会員の皆様のご意見をもとに、郵送投票廃止とする場合は理事会にて審議した上 2021 年 3 月の ESJ68（岡山）総会にて役員・代議員選任規則（<https://esj.ne.jp/esj/Rule/Election.html>）の規則改訂を提案する予定です。

日本生態学会事務局

〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Email:office@mail.esj.ne.jp Fax:075-384-0250



第 68 回日本生態学会大会開催について

2021 年 3 月開催予定の第 68 回日本生態学会大会（岡山）については、新型コロナウイルスの感染拡大にともなう目下の社会状況と今後の状況の不透明さや長期間にわたる対応の必要性に鑑み、対面での大会開催に代えてオンライン開催を検討しています。

具体的な開催方法が決定しましたら改めてお知らせいたします。

日本生態学会各賞候補者募集

第 19 回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第 25 回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

第 14 回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 2 名の受賞者を選考し、各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

第 9 回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後 4 年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、各々 5 万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<https://esj.ne.jp/esj/>) よりダウンロード
※募集要項と応募様式は 6 月中旬に公開されますので、最新の様式にてご応募下さい。

3. 送付先：

(郵送) 〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)

(電子メール) office@mail.esj.ne.jp

4. 締め切り日：2020 年 8 月 17 日（月）必着

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

- また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞細則

- 第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。
- 第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）細則

- 第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候

- 第 5 条 補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第 6 条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第 7 条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第 8 条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金5万円を贈呈する。
- 第 9 条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第 10 条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

追悼～中野繁氏を偲ぶ：バハカリフォルニア沖海難事故から 20 年～

カート・D・ファウシュ（コロラド州立大学）、コールデン・V・バクスター（アイダホ州立大学）、
エイミー・M・マーカレッリ（ミシガン工科大学）、谷口義則（名城大学）

2000 年 3 月 28 日に中野繁氏（京都大学生態学研究センター、当時）がバハカリフォルニア沖（メキシコ）でカリフォルニア大学の研究者らと共に海難事故に遭い、消息を絶ってから 20 年が経ちました。このたび、私たちは追悼文と共に中野氏の功績を偲び、これを日本の皆さまと共有したいと思います。

3 月 28 日は、多くの皆さまにとって「辛い」あるいは「ほろ苦い」ものでしょう。この追悼文は、長い年月を経てなお、中野繁氏の研究が私たちを次の研究へと駆り立てていくことをお伝えしたく、したためました。中野氏の人生と研究は、同氏の他界後も私たち研究者や学生諸氏の繋がりを育んできました。それはまるで小石を水に投じたときに生まれる波紋の広がりようです。

私は、中野氏と共に数多くの論文を発表しましたが、彼と会うことができなくなった後も、彼の人生や彼の研究について著してきました（これについては後段で谷口氏が触れます）。その一方で、未発表の研究が 2 つあり、論文として仕上げるのがいつも気にかかっていました。

きっかけは、2017 年に日本生態学会年会参加のために来日したことでした。谷口義則氏（名城大学）と北野聡氏（長野県環境保全研究所）と会い、1990 年代に中野氏が両氏と共に集め解析していたイワナ的一种オショロコマの顎の形態に関する研究データの再分析と論文化について議論したのです。最終的に、三宅洋氏（愛媛大学）、小泉逸郎氏（北海道大学）、菅野洋一郎氏（コロラド州立大学）がチームに加わり、研究を進めました。

最近、2 年半の月日を経てようやくこの論文を筆頭著者・中野繁として発表することができました（Nakano et al. 2020）。掲載誌は、中野氏が発表を夢見ていたイギリスの *Biological Journal of the Linnean Society* です。本誌は、チャールズ・ダーウィンやヘンリー・ウォレス等の著名な進化生物学者らが初期の研究成果を発表したことで知られる、世界で最も歴史ある生物学系学術誌の 1 つです。

この研究により、私たちは北海道の川に棲むオショロコマにおいて、近縁な競争種アメマスが同所的にいと下顎と頭が短くなることを進化生物学の視点から証明することに成功しました。このような形態の変化により、オショロコマは川底の水生昆虫を餌として利用しやすくなり、アメマスとの競争を避けられるのです。1990 年代当時、中野氏は形質置換と呼ばれるこの現象に興味をそそられデータを集めたものが、ようやく日の目を見ることとなりました。この研究成果は既にヨーロッパの研究グループが発表した論文にも引用されるなど注目されています。

一方、私と中野氏は 1990 年代初頭に北海道のポロシ

リ沢でオショロコマとアメマスの行動を潜水観察する共同研究を始めました。この時私は潜水による個体の遊泳位置の記録方法を中野氏から学び、異種個体間の詳細なデータを用いて近縁な両種の共存機構を解明する理論の提唱にこぎ着けました。しかし、当時の調査結果の一部が未解析のまま残されており、現在、北野氏、菅野氏らと共に執筆を続けており間もなく発表できる見込みです（Fausch et al. 準備中）。

このように中野氏らと共に取り組んだ数多くの研究成果により、オショロコマとアメマスという近縁な魚類が河川の中の小さな淵から北海道という大きな島に至るまで様々な空間スケールで共存（または互いに排除）する仕組みを明らかにできたものと考えています。

（カート・D・ファウシュ）

私自身は中野氏に直接お会いする機会はありませんでしたが、大きな影響を受けました。2002 年、私はファウシュ氏の元で研究を行うポスドクとして、妻と幼い子供を伴い北海道に赴きました。そして、村上正志氏（千葉大学）をはじめとする大勢の日本人大学院生のご協力を頂いて研究を行うことができましたが、すべて中野氏の研究とアイデアを礎として構築しました。北海道で積んだ研究の経験は、私に科学研究をどう捉え、どう実行するのかを叩き込み、研究者としての人生を歩む上で不可欠なものになりました。

北海道大学苫小牧研究林を流れる幌内川で行った研究の過程で中野氏の元共同研究者や元学生諸氏と繋がりを持ったことは本当に幸いでした。皆がアイデアを共有しました。また私の家族も仲間として温かく迎えてくれたことには、今でも感謝の気持ちで一杯です。これまで私が発表してきた研究論文は、どれも中野氏の“遺産”の一部と呼んで良いものばかりです。同時に、苦楽を共にした共同研究者らとの友情の証でもあります。日本を離れアメリカの大学でポストを得て早くも 15 年が経ちますが、あの時みなさんに可愛がって頂いた“よちよち歩き”の娘は今や大学生ですし、私自身も大学院生やポスドク研究員を指導するようになり、その数も 30 人近くに上ります。

私が教えてきた学生たちも皆、中野氏の影響を受けています。そもそも私がファウシュ氏の元でポスドク研究員となった時、既に中野氏の科学研究へのアプローチと情熱に強く惹かれていました。カリフォルニア大学バークリー校のメアリー・パワー氏はこう述べています。「今では『古典』とさえ評される Nakano and Murakami (2001) 論文は、食物網生態学における全体論と厳密さの新しい基準を作った」と。私はこの研究の示すアイデアと膨大な努力の結晶に魅了され、私自身が学生や共同研究者ら

と共にそれに少しでも近づこうと歩み続けてきました。

いくつか例を挙げますが、いずれも中野氏らが幌内川の上空をビニールハウスで覆い河畔からの陸生動物の移入を遮断するという大規模な操作実験に触発されて行ったものです。米国西部の山地溪流で行った研究では、侵略的外来魚カワマスが河川・河畔植生間の食物網に及ぼす影響を明らかにしました (Benjamin et al. 2011, 2013)。また、川に遡上したサケが死に、その遺骸が微生物過程、魚類、クモ類、コウモリにまで影響を及ぼすこと (Marcarelli et al. 2014, Collins et al., 2016, 2020)、川と氾濫原のネットワーク (Bellmore et al. 2013, 2014, 2015) や流況 (Cross et al. 2011, 2013; Kennedy et al. 2016; Behn and Baxter 2019) が在来魚類の保全に重要であることを示す研究も行いました。それぞれの研究は、数千サンプルにも及ぶ無脊椎動物と魚類の消化管内容物の解析に基づく中野式の緻密な食物網研究に倣ったものです。

直近数か月で中野氏の足跡が滲み出る論文をいくつか発表することができました。アイダホ州の河川で複数年にわたりサケの遺骸の影響が直接および間接的に食物網に認められた研究 (Collins et al. 2020)、複数年にわたる綿密な食物網解析と水銀測定の手法を組み合わせた研究結果 (Walters et al. 印刷中) などです。後者の研究では、グランドキャニオンを流れるコロラド川とその河畔域の間で水生昆虫、魚類、それらの相互作用によって水銀の循環と運命が決定する事実を明らかにしました。さらに、これがおそらく最も感動的なことですが、中野氏自身が幌内川で収集したデータを論文化しました。この研究は、私のもとでポストドク研究を行ったエイミー・マーカレッリ氏から説明してもらいます。

(コールデン・V・バクスター)

私は2006年から2009年にかけてアイダホ州立大学のバクスター氏のもとでポストドク研究員として生態系生態学の研究に携わりました。私も中野繁氏を個人的には存じ上げません。私の研究は、系間の物質やエネルギー移動の視点から河川生態系を理解しようとするものです。生態系生態学者は往々にして中野氏が研究の核とした生物と環境の相互作用という存在を重視しないことが多く、私の研究ではこの欠陥に対処することを目論みました。

私はポストドクとしてバクスター氏から直接学びましたが、その過程で中野氏が発表した研究論文から魚の形態、行動および森林・河川群集相互作用を結びつける研究の全貌を学びました。中野氏らによる一連の研究は、特に幌内川で収集された魚とその餌資源に関する詳細かつ膨大なデータに基づいています。この豊富なデータこそが生物と生態系過程のリンクの理解を可能にしました。

2008年、私は中野氏による食物網研究の“遺産”を足場として、村上、三宅、バクスター、ファウシュの各氏を含む多くの研究者と幌内川における生

産量と魚類へのエネルギー移送に関する共同研究を開始しました。長期に及ぶデータ分析、考察、執筆を経て、幌内川に生息する魚類の種間相互作用が陸生の餌生物の可用性と共に変化し、外来種ニジマスが種間競争によりオシロココマに負の影響を及ぼす恐れがあることを見出しました。この結果は、中野氏とバクスター氏が河川への落下陸生昆虫の供給を減少させた実験から得た発見を支持し、さらには生態系に予期せぬほど長期的な影響を与えることも明らかにしました。本研究の結果は、中野氏らが発表したのと同じ Ecology 誌に掲載されました (Marcarelli et al. 2020)。

(エイミー・M・マーカレッリ)

2015年、ファウシュ氏は「For the Love of Rivers: A Scientist's Journey」(オレゴン州立大学出版) を出版しました (Fausch, 2015)。私たち河川生態学者にとって研究対象である川は常に身近な欠かせない存在です。しかし、本書は一般向けに“なぜ川は人を魅了するのか?”をテーマとし、これを中野繁氏の研究と人生を軸に描き出しています。1988年に札幌で開催された国際学会で中野氏と出会ったことを契機に、ファウシュ氏はコロラドから日本へ何度も旅をすることとなりました。不慣れた文化に戸惑いながら日本人ですら足を踏み入れることの少ない北海道の山地溪流で共同研究を始めました。ヒグマが数多く生息する山中の小屋で寝食を共にしながら……。本書は、2000年3月に起きた突然の悲劇的な事故についても触れます。河川生態学を扱う内容である以上に、「愛しき川へ」の原題の通り生命の尊さを表そうとしていると言えるでしょう。本書は、私たち研究者が河川生態系保全のためにできることを中野氏の研究人生を振り返りながら展望しています。2015年、本書はアメリカで自然環境をめぐる優れたノンフィクション文学に贈られるネイチャー・ライティング賞 (Sigurd Olson Nature Writing Award) を受賞しました。インターネット通販等で購入できますが、残念ながら和訳版は刊行されていません。

さらに、2017年、コロラド州立大学に「ファウシュ・中野奨学金」制度が生まれました (図1)。これは、同大学で主に水圏生態学を学ぶ学部生に給付型奨学金を付

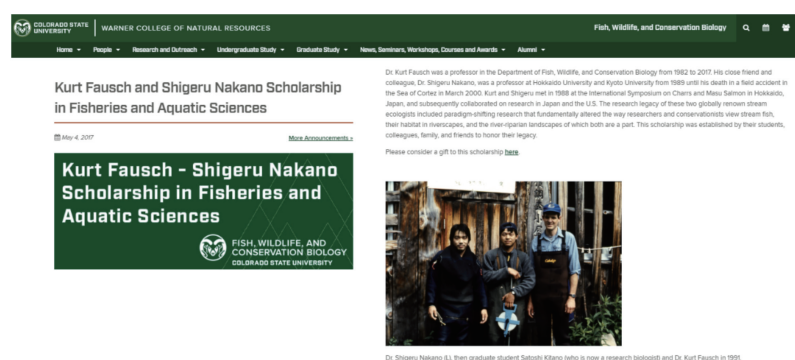


図1. 2017年、コロラド州立大学 (CSU) は「カート・ファウシュ・中野奨学金」を設立。毎年、同大学で水圏生態学を学ぶ学部生1名に給付型奨学金が付与されている。

与することを目的として、ファウシュ氏の門下生の1人パトリック・コチョヴスキ氏（アメリカ地質調査所）が呼びかけ人となり同大学が設立しました。ファウシュ氏が同大学の職から退くことを記念すると共に、中野氏との友情と両者の“研究遺産”を称えようと寄附が世界中の研究仲間呼びかけられました。結果、北米、欧州を中心に（日本からも）数多くの生態学者がこれに応じ、短期間のうちに目標ファンド額が達成されました。2018年に運用が始まり、2019年には2人目の奨学生が選出され、第2、第3のカート・ファウシュや中野繁の誕生を後押ししています。

（谷口義則）

冒頭にも書きましたが、私と中野繁氏との間に生まれた友情と2人のボロシリ沢での研究以降、中野氏の“遺産”を礎とする共同研究が数多く続けられてきました。そして今もっとも驚嘆させられるのは、この過程で築かれた人間関係が広範囲に及ぶことです。その一部をご紹介します。

谷口氏は偶然にも学部生としてコロラド州立大で学んでいたことから、私を通じて中野氏と結びつき博士研究を行いました。以来毎年のようにコロラド州を訪れています。現在、日本の大学生をロッキー山脈国立公園に引率し、アメリカの自然環境保護を学ぶプログラムを展開しています。

米国・魚類野生生物局の生態学研究者ライアン・フォガティ氏は、中野氏の生涯と研究を主題とする映画「RiverWebs」の影響を受け、2018年、同局の『自然保護ヒーロー賞』に中野氏を推薦しました（図2）。同賞はこれまでに沈黙の春（1962）を著したレイチェル・カ

ーソン氏をはじめとするアメリカの環境保護に尽力した人物に授けられてきました。中野氏は日本人として初めて同賞受賞の栄に浴しましたが、同氏の貢献がアメリカの自然保護に焦点を当てたものでは無かったことに鑑みれば異例のことです。フォガティ氏は、この受賞理由として中野氏の見出した森と川の繋がりに関する法則が普遍的であることを挙げた上で、同局が全米で行う河川と河畔林の保全プロジェクトに適用していると述べています。

バクスター氏は、三宅氏をアイダホ州立大に招き共同研究を行うなど、日本で出合った研究者らの多くと交友関係を育み共同研究を続けています。

マーカレリ氏は、大学で担当する生態学の授業において生物間競争や陸域・水域の相互作用を教える際にボロシリ沢と幌内川の研究を題材としています。学生たちは皆、詳細かつ広範な自然観察に裏打ちされた優雅かつシンプルな実験手法に畏敬の念を抱き、長期間の自然観察により異なる世界が見えることを学べるのだと述べています。

中野氏の研究を通じて、私たちは人間関係こそが科学研究を進める上で重要であることを学んだように思います。科学は、研究者が互いに協力してアイデアと情熱を共有することでより優れたものになります。中野氏のお陰で研究者らは遠く離れていても互いに繋がり、新しい科学の方向性とその理解を促進し続けるものと確信しています。

（カート・D・ファウシュ）

引用文献：

- Behn, K. E. and C. V. Baxter. 2019. The trophic ecology of a desert river fish assemblage: influence of season and hydrologic variability. *Ecosphere* 10(1):1-24.
- Bellmore, J. R., C. V. Baxter, P. J. Connolly, and K. Martens. 2013. The floodplain food web mosaic: a study of its importance to Pacific salmon and steelhead with implications for their restoration. *Ecological Applications* 23:189-207.
- Bellmore, J. R., C. V. Baxter, and P. J. Connolly. 2015. Spatial complexity reduces interaction strengths in the meta-food web of a river floodplain mosaic. *Ecology* 96:274-283.
- Benjamin, J. R. K. D. Fausch, and C. V. Baxter. 2011. Species replacement by a nonnative salmonid alters ecosystem function by reducing prey subsidies that support riparian spiders. *Oecologia* 167:503-512.
- Benjamin, J. R., F. Lepori, C. V. Baxter, and K. D. Fausch. 2013. Can replacement of native by nonnative trout alter stream-riparian food webs? *Freshwater Biology* 58:1694-1709.
- Collins, S. F., C. V. Baxter, A. M. Marcarelli, M. S. Wipfli, S. Florin, L. Felicetti, and G. Servheen. 2020. Reverberating effects of resource subsidies in stream-riparian food webs. *Oecologia* 192:179-189.
- Collins, S. F., C. V. Baxter, A. M. Marcarelli and M. S. Wipfli. 2016. Effects of experimentally added salmon subsidies

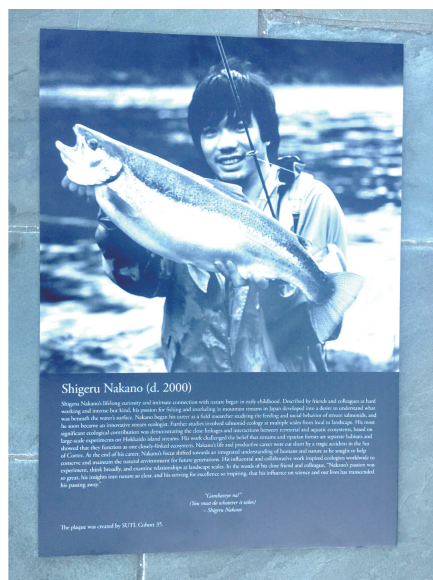


図2. 2018年、中野繁氏は米国魚類野生生物局のConservation Heroes Awardを受賞。作成されたパネルが同局（ウェストバージニア州）の壁面に飾られている。写真提供：ライアン・フォガティ。

- on resident fishes via direct and indirect pathways. *Ecosphere* 7(3):1-18.
- Cross, W. F., C. V. Baxter, K. C. Donner, E. J. Rosi-Marshall, T. A. Kennedy, R. O. Hall, Jr., H. W. Kelly, and R. S. Rogers. 2011. Ecosystem ecology meets adaptive management: food web response to a controlled flood on the Colorado River, Glen Canyon. *Ecological Applications* 21:2016-2033.
- Cross, W. F., C. V. Baxter, E. J. Rosi-Marshall, R. O. Hall, Jr., T. A. Kennedy, K. C. Donner, S. E. Z. Seegert, H. A. W. Kelly, M. D. Yard, and K. E. Behn. 2013. Foodweb dynamics in a large river discontinuum. *Ecological Monographs* 83:311-337.
- Fausch, K. D. 2015. *For the Love of Rivers: A Scientist's Journey*. Oregon State University Press.
- Fausch, K. D., S. Nakano, S. Kitano, Y. Kanno, and S. Kim. In preparation. Interspecific social dominance networks reveal mechanisms promoting coexistence in Hokkaido charrs.
- Kennedy, T. A., J. D. Muehlbauer, C. B. Yackulic, D. A. Lytle, S. W. Miller, K. L. Dibble, E. W. Kortenhoeven, A. N. Metcalfe and C. V. Baxter. 2016. Flow management for hydropower extirpates aquatic insects, undermining river food webs. *BioScience* 66:561-575.
- Marcarelli, A. M., C. V. Baxter, J. R. Benjamin, Y. Miyake, M. Murakami, K. D. Fausch, and S. Nakano. In press. Magnitude and direction of stream-forest community interactions change with time scale. *Ecology*.
- Nakano, S., K. D. Fausch, I. Koizumi, Y. Kanno, Y. Taniguchi, S. Kitano, and Y. Miyake. 2020. Evaluating a pattern of ecological character displacement: charr jaw morphology and diet diverge in sympatry versus allopatry across catchments in Hokkaido, Japan. *Biological Journal of the Linnean Society* 129:356-378.
- Walters, D. M., W. F. Cross, T. A. Kennedy, C. V. Baxter, R. O. Hall, Jr., and E. J. Rosi. 2020. Food web controls on mercury fluxes and fate in the Colorado River, Grand Canyon. *Science Advances*. In Press.

和訳：谷口義則（名城大学）

著者連絡先：

谷口義則

〒 461-0048 愛知県名古屋市東区矢田南 4-102-9

名城大学人間学部

Email: ytani@meijo-u.ac.jp

第 67 回日本生態学会大会（名古屋）報告

内海俊介（大会企画委員会 前委員長）

日本生態学会第 67 回大会は、2020 年 3 月 4 日（水）から 8 日（日）までの 5 日間、名城大学にて開催される予定でした。しかし、大変残念ながら新型コロナウイルスの影響で中止せざるを得なかったのは皆さんもご存知のとおりです。

事前の参加登録で既に 1962 名となっており、これまでの大会同様に 2000 名を超える参加者の見込まれる盛大な大会となると考えていました。67 件の集会（シンポジウム・自由集会・フォーラム）が組まれており、シンポジウム数は過去最多となっていました。分子生物学会との共同企画も 3 件ありました。また、1223 件の一般講演（ポスター・口頭）と高校生ポスター 60 件が予定されていました。一般講演数も、EAFES 合同大会であった第 59 回大会（大津）を除けば、ここ 10 年で最多の登録数です。近年は、さまざまな学会の存続や運営が難しくなっているという声も聞こえてくる状況にあって、日本生態学会は堅調な成長をしています。それを支えるのが第一に自由で魅力的な大会が行われていることであるのは論を待ちません。今年もまた、多様な生物に、フィールド、ゲノミクス、理論研究まで、幅広い分野が一堂に会し大変魅力的な大会であったらと思います。

名城大学の日野先生と橋本先生を中心に、名古屋大会の実行委員会の皆様には、およそ 2 年前から今大会の準備をはじめていただいております。会場の確保や、懇親会・公開講演会・子ども生態学講座の準備、託児所の開設、協賛企業や設営業者との対応、そしてたくさんアルバイトスタッフの募集と配置など、多大なご尽力をいただきました。さらに大会中止の決定直前まで、消毒用アルコールとマスクの発注などの感染症対策をご準備していただいていたことにもここで言及しなくてはなりません。本当にありがとうございました。

大会の持続可能なあり方について

日本生態学会は非常に大きな大会になってきている一方で、自由な雰囲気と多様性を重んじる伝統があり、それは大変すばらしいものであります。しかしながら、その運営はとても複雑化してきました。準備と運営を支えてきた企画委員会と実行委員会は、皆様と同じ学会員で、本務の傍らでのボランティアです。そのため、過重な負担や特定の個人への依存が問題になっており、持続可能な大会のあり方について、外部委託も含めて数年にわたり検討が重ねられてきました。そして、総会での改革案の承認を経て、前回神戸大会は、いよいよさまざまな大会改革が本格的に実施された大会でした。名古屋大会はそれを踏襲し、整理と細かい点での微修正をすすめました。踏襲してきた事項は主に以下のことが挙げられます。

集会の様式の統廃合、自由集会聴講券の販売、スピーカーレディールームの設置、申し込み関連日程の簡素化（すべて申し込み締め切りを 10/31 に一本化、申し込みシステムを 23:59 まで稼働、新規入会について学会費納入期限を要旨登録期限に合致させる）、プログラム・名札の完全日英併記化、などです。

これに加えて、名古屋大会では、申し込みマニュアルの英語版をはじめて作成しました。また、日英併記により、ページ数が大幅に増加してしまったプログラムのページ数削減について努めました。そして、申し込みの簡素化をさらに進めるために、郵便振替やコンビニ・クレジットカード払いなど支払い方法によって異なっていた支払い期限についても一本化しました。

さらに、学会理事会において、フォーラムの位置づけと申し込みや参加のルールが明文化されました（詳しくはニュースレター 9 月号の大会案内をご確認ください）ので、名古屋大会からはそれにしたがって運営されることとなりました。

難しい判断があったのは、ポスターの件数にはじめて上限を設けた点です。審査対象のポスターと一般ポスターのそれぞれについて 500 件という上限を事前に設定しました。これまでの大会でもポスターは合計で 1000 件という目安で準備をしてきましたので、発表機会の削減というわけではないことはまずご理解いただければと思いますが、あらためて経緯をご説明いたします。神戸大会では、審査対象がついに 500 枚を超え、今後もその数は増加することが見込まれることから、いよいよ会員の皆様をお願いする審査員の確保が困難であるという問題に直面しています。また、そもそも会場キャパシティとして同日に 500 枚を設置できるようにするのが困難な場合も多く、一方でポスター発表の日数を 2 日から 3 日間にする、ポスター発表を運営するポスター部会メンバーが大会に参加することが事実上不可能に近くなってしまいます。今後の大会でもこの方向性は維持される可能性が高いと思いますが、持続可能性という点でご理解いただければ幸いです。また、この上限の設定においては、申込システム上で自動化するというにしました。審査ポスターについても一般ポスターについても、500 件に達した時点で申し込みができなくなり、口頭発表など他の選択肢しか選ぶことができなくなる仕様になっています。その上で万全を期すため、最終的にマニュアルでの数調整をできるように、口頭希望だがポスターも可・ポスター希望だが口頭も可、という選択肢も用意しました。結果として、システムのトラブルは発生せず、数としてもマニュアルでの調整の必要もなく、上手くいったように思っております。

大会中止および講演の公式記録について

2月5日に新型コロナウイルス感染症予防のための最初の参加キャンセルがありました。また、2月10日は台湾とオーストラリアから参加を予定されていた方からの講演キャンセルがありました。これを受けて、学会執行部に状況の報告と大会開催に関わる可能性について報告をいたしました。東日本大震災での経験があったため、現在各大会では危機管理マニュアルというものが用意されるようになっていきます。こちらは、大会開催中での危機に対応するものとして用意されてきたものですが、今大会ではそれを前倒して危機管理マニュアルを改訂したうえで、2月12日に危機管理委員会が発足されました。委員会は学会長・学会執行部・大会会長・企画委員会委員長などによって構成されました。そして連日の議論を経て、2月18日懇親会中止、2月20日キャンセル・ポリシー、2月21日大会中止といった一連の発表となりました。それぞれのプロセスでは、学会理事会や監事による議論と確認が行われています。大会会期中は、学会執行部と事務局の尽力により、総会や受賞講演がオンラインで成功裏に実施されました。また、キャンセル・ポリシーに基づき、未納の大会参加費の支払いを受け付けたのち、支払いがあったものを公式な講演記録として認める最終版のウェブ要旨集を3月31日に公開しました。未納が確定した講演につきましては、印刷したプログラムおよびPDFからは削除されていませんが、ウェブ要旨集からは講演題目・要旨・発表者リストからすべて削除されています。このウェブ要旨集が名古屋大会の公式な講演記録となりますので、ご留意いただきますようお願いいたします。

上記のように名古屋大会は準備と運営がされてきました。次回岡山大会については、宮竹貴久大会会長、廣部宗大会実行委員長、幸田良介企画委員長のもと、すでに会場も確保され、準備が進められています。次期大会では、さらに魅力ある生態学会大会となるようにご尽力いただいております。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大については名古屋大会開催時期よりも状況は悪くなってしまいました。現在は、例年通りの開催を目指して準備が進んでおりますが、同時にオンライン開

催も視野にいれ難しい舵取りをしており、学会員の皆様にはご不便をおかけする必要も出てくる可能性もあります。学会員の皆様方にもどうかあたたかいご支援とご協力をお願いいたします。

担当地区会で組織される実行委員会と学会専門員委員会の大会企画委員会が両輪となって大会を運営しています。講演や各種集会の受付、賞の運営やプログラム編成などを企画委員会が担うことによって、実行委員会の負担を軽減し、さまざまなノウハウを蓄積して安定した運営を行えるようになりました。今後も学会員の皆様のご協力を賜り、持続的で安定的な大会運営ができるように努めてまいります。

謝辞

最後になりましたが、名古屋大会の準備と運営にあたりお世話になった以下の方々に厚く御礼申し上げます。

日野輝明大会会長、橋本啓史大会実行委員長、中川弥智子大会実行副委員長をはじめとする名古屋大会実行委員会の皆様、各部会長（直江将司運営部会長、高見泰興発表編成部会長、川西基博シンポジウム部会長、竹内勇一ポスター部会長、栗山武夫高校生ポスター部会長、石川尚人英語口頭発表部会長）をはじめとする大会企画委員の皆様、学会執行部、事務局の皆様

審査員を務める予定であった皆様：審査員を務めることを承諾してくださっていた方々は、今大会も多数いらっしゃいました。今回はお名前を挙げることを控えさせていただきますが、実にのべ203名の方々が審査員を務めることを承諾してくださっておりました。ポスター賞：132名、英語口頭発表賞：41名、高校生ポスター賞：30名。新型コロナウイルスの問題により大会開催の可否が検討されているさなかには、これらボランティアのために大会に行かざるを得ないかどうかと悩まれていた方も多くいることを聞いております。ぎりぎりのタイミングでの大会中止の決断だったと思いますが、ご心労をおかけしたことをお詫びしますとともに、大会のために審査をお引き受けいただいたことについて謹んで御礼申し上げます。

第 67 回日本生態学会大会（名古屋）報告

占部城太郎（前学会長）

東北大学大学院生命科学研究科

新型コロナウイルス（COVID-19）の影響により、2020 年 3 月 4 日～8 日に開催予定であった第 67 回日本生態学会名古屋大会（名城大学天白キャンパス）は中止にせざるを得ませんでした。ただし、中止にあたっては、会員の研究活動とその実績を残すため、大会参加費を支払った会員は、ウェブ上要旨にある研究成果を本学会が業績として認めることとしました。また、代議員総会、授賞式、受賞講演は、名城大学天白キャンパスを会場にして予定されていたプログラムの日時に、インターネットでのライブ配信で実施しました。下記、この中止とライブ配信に至る経緯を時系列で記するとともに、会長メッセージの一部を再録することで、当時会長であった私からの報告に代えさせていただきます。

- 2 月 1 日 ・ 2019 年度日本生態学会第 4 回理事会（東京）
新型コロナウイルスについての話題無し
- 2 月 5 日 ・ 新型コロナウイルス感染症予防のための参加者からの最初のキャンセル
- 2 月 10 日 ・ 台湾・オーストラリアからの参加者から講演キャンセルの連絡
- 2 月 12 日 ・ 学会長より、危機管理委員会を前倒しで発足することを第 67 回生態学会日野輝明大会長、橋本啓史大会実行委員長に依頼
・ 学会長、大会長、実行委員正副委員長、学会執行部（会長・副会長・専務・庶務・会計理事）、大会企画委員長により大会実行委員会を組織
・ 危機管理マニュアル名古屋大会版の改訂
- 2 月 10 日以後 3 月上旬まで
・ 会員 / 参加者からの問い合わせ多数。案件により、学会長と内海俊介大会企画委員長で 1 件ずつ個別に対応し・返答
- 2 月 18 日 ・ 危機管理委員会（ネット会議）
懇親会中止の決定、一斉メールと HP で参加者に告知
・ 執行部会議開催（以後、随時ネットによる執行部会議開催）
キャンセルポリシーを先に作成することを決定
ライブ配信の可能性を京大生態学研究センター中野伸一センター長に打診
- 2 月 19 日 ・ 執行部でキャンセルポリシーを作成、理事会報告

- 2 月 20 日 ・ 受賞者へ受賞講演をライブ配信にて行う可能性を連絡
・ 一斉メールと HP で会員にキャンセルポリシーを告知
・ 大会中止に伴う参加費納入システムの再構築作業開始
- 2 月 21 日 ・ 危機管理委員会（ネット会議）
参加者の発表を業績と認めたとえでの大会中止を決定
夕刻 監事に確認、理事会報告承認
展示企業の出展料返金を決定
・ 一斉メール、HP 等で会員に大会中止を告知
・ 執行部、大会実行委員会、京大生態研センターとライブ配信の打ち合わせ開始
- 2 月 25 日 ・ 学会長事務局に訪問、予算や中止に伴う諸事について打ち合わせ
・ 危機管理委員会（ネット会議）
ウェブ配信等準備、支払いシステム稼働
- 2 月 26 日 ・ 学会長名城大訪問、日野大会長・橋本実行委員長とネット配信会場等の確認と現場打合わせ
・ 各賞受賞者へ受賞講演のライブ配信の詳細を連絡
- 2 月 28 日 ・ 各賞受賞者へライブ配信の依頼と詳細を再度連絡
・ 京都大学生態学研究センターとライブ配信の詳細計画
- 3 月 5 日 ・ 名城大学を会場に Zoom システムにより代議員会開催
- 3 月 7 日 ・ 名城大学にて
Zoom システムと You Tube の併用により代議員総会開催
授賞式・受賞講演会のライブ配信

[3 月 7 日会長メッセージからの抜粋]

私達の大会は会員のボランティア活動で成り立っています。大会実行委員会委員も大会企画委員会委員もみなボランティアで、自身の時間を犠牲にしながら、1 年以上前から準備を進めてきました。その献身的な苦勞を考えると、中止という決断は個人的には受け入れがたいものでした。しかし、新型コロナウイルスのために気が進まない状態での参加者が一人でもいれば、一人でも感染者が出たとしたら、学会としては大きな痛手です。でするので、中止にあたっては、判断基準を極端に安全側に

設けて判断しました。中止にあたっては、懇親会場をキャンセルするなど、残念な気持ちであるうえに、さらに辛い仕事をお引き受けいただいた大会実行委員会委員に申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。一方で、学会定款には年1回の総会と学術集会の実施が義務付けられています。

そこで、本大会を楽しみにしていた会員及び大会参加申し込み者に報いるためにも、代議員総会と大会のハイライトである受賞講演会をネットでライブ配信することにしました。ライブ配信にあたっては、名城大学が会場を、京都大学生態学研究センターが技術的協力を快く引き受けていただきました。ライブ配信は実験でもあり、上手くいくなら大会のオプションとして今後も活用できるでしょう。本文は、このライブ配信の前に執筆しており、果たして上手くいくか甚だ不安もありますが、ライブ配信を通じて本大会に関わったすべての会員のみなさまに少しでも報いることが出来たら嬉しく思います。

会員のみなさまにお願いがあります。第67回日本生態学会プログラムがお手元に届いていると思います。裏表紙をめくってください。そこには、大会実行委員会、大会企画委員会にたずさわったすべての会員のリストが

掲載されています。もし、そこに友人やご存知の名前があったら、次にその方に会ったとき、一言「ありがとう」と声をかけ、労って欲しいのです。よろしくお願いいたします。

[4月22日の追記：名城大学からのライブ配信は大きなトラブルもなく、予定どおり行うことができました。ひとえに、会場を用意していただいた名城大学の日野輝明さん、橋本啓史さん、技術的支援を一手に引き受けていただいた京都大学生態学研究センターの神崎裕一郎さん、会場に足を運んでいただいた、各賞受賞者、理事のみなさまの協力のおかげです（写真）。特に、各賞の殆どの受賞者はライブ配信での受賞講演を前向きに受け止め、印象的で刺激的な講演をされました。ライブ配信終了後、多くの会員の皆様から、受賞講演の内容はもちろん、このような形で受賞講演会を実施したことに好意的な意見をいただきました。ご協力いただいた受賞者のみなさん、ライブ配信に尽力していただいた大会実行委員会、理事、執行部・事務局のみなさん、本当にありがとうございました。今回の経験が、すべての会員にとって役立つものになることを祈っています。]



記 事

I. 一般社団法人日本生態学会 2020 年度定時総会（第 67 回大会会員総会、20 年 3 月 7 日、代議員 14 名・委任状提出代議員 7 名・会員約 30 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2019 年度会員数・学会誌発行状況

日本生態学会誌 69 巻

	1 号	2 号	3 号	別冊
発行部数	2000	2050	2070	3050
配本部数	2000	2029	1999	2027
残部数	0	21	71	1023

保全生態学研究 24 巻

	1 号	2 号
発行部数	1120	1120
配本部数	1102	1031
残部数	18	89

Ecological Research Vol.34

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	110	110	110	110	110	110
配本部数	106	107	109	108	110	110
残部数	4	3	1	2	0	0

会員数

	2018 年 12 月末現在			2019 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	248	148	396	248	152	400
東北	172	97	269	166	102	268
関東	992	374	1366	997	405	1402
中部	381	151	532	370	169	539
近畿	466	302	768	473	328	801
中四国	185	59	244	188	66	254
九州	223	86	309	221	92	313
外国	43	36	79	43	32	75
小計	2710	1253	3963	2706	1346	4052
賛助			78			72
名誉			4			4
小計			82			76
合計			4045			4128

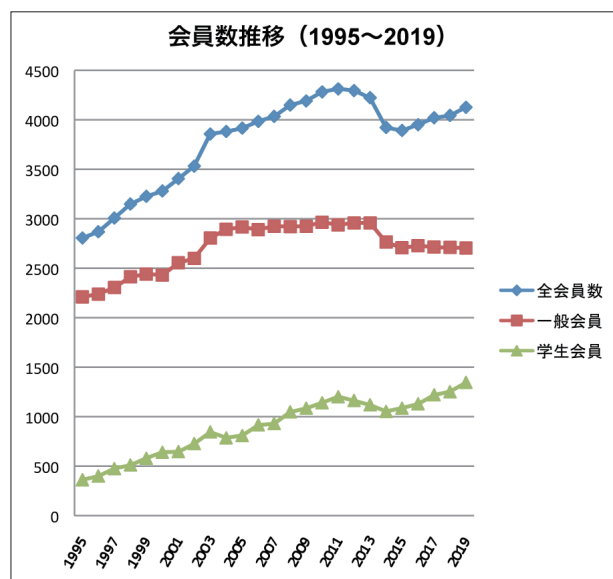
会費納入率（各年 12 月末現在）

	2018 年		2019 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	94.4	75.7	92.3	71.7
東北	94.2	67.0	94.0	71.6
関東	92.2	69.3	92.1	73.8
中部	93.4	68.2	94.1	72.8
近畿	94.0	73.8	93.7	73.5
中四国	95.7	66.1	95.2	81.8
九州	94.6	70.9	95.9	72.8
海外	83.7	66.7	67.4	34.4
全体	93.3	70.7	92.9	72.6

雑誌不要者数変遷（各年 12 月末）

	一般					学生				
	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要	1 月現在
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2582	321	12%	419	16%	952	221	23%	239	25%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	339	29%	364	31%
2012	2760	478	17%	606	22%	1135	407	36%	431	38%
2013	2757	531	19%	679	25%	1097	477	43%	501	46%
2014	2765	614	22%	789	29%	1054	495	47%	528	50%
2015	2707	623	23%	811	30%	1069	522	49%	563	53%
2016	2729	726	27%	952	35%	1130	716	63%	633	56%
2017	2713	830	31%	1054	39%	1220	783	64%	844	69%
2018	2710	964	36%	2698	99.6%	1253	896	72%	1253	100%
2019	2706	1041	38%	2684	99.2%	1346	1054	78%	1335	99.2%
2020	2594	1041	40%	2573	99.2%	1344	1103	82%	1332	99.1%

※2013 年までは AB 会員数



b. 庶務報告（2019 年 4 月～2019 年 2 月）

1. 法務局に 2019 年定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された（4 月 1 日）
2. 日本学術振興会より平成 31 年度科研費（国際情報発信強化 A）の内定通知があった（H30 年度より 5 年間交付、H31 年度 12,800,000 円）（4 月 1 日）
3. 日本学術振興会より平成 31 年度科研費（公開講演会）について不採択通知があった（4 月 1 日）
4. 日本学術振興会賞への生態学会員 1 名の推薦・申請を行った（4 月 8 日）
5. 日本学術振興会へ平成 30 年度科研費（公開講演会）実績報告書を送付した（4 月 10 日）
6. 琵琶湖賞運営委員会により第 20 回生態学琵琶湖賞受賞者として陀安一郎氏と安原盛明氏の受賞が決定した（4 月 16 日）
7. 日本生態学会へ平成 30 年度科研費（国際情報発信強化 A）実績報告書を送付した（4 月 19 日）
8. NPO 法人女子中高生理工系キャリアパスプロジェクト

- トの賛助会員申込みをした（5月30日）
9. 生態学琵琶湖賞授賞式および受賞記念講演を行った（7月3日）
 10. 日本生態学会誌別冊「フィールド調査における安全管理マニュアル」を希望会員43名に送付した（9月24日）
 11. 名古屋大学出版会発行「森林の系統生態学」への図表転載を会長名で許可した（9月27日）
 12. 厚生労働省の地域別最低賃金の改定に伴い、生態学会パートタイム（アルバイト）基準の時給を変更した（10月1日）
 13. 学会ドメインにSSL証明書を導入した（10月7日）
 14. 次々期会長候補および次期代議員選挙の開票を龍谷大学瀬田キャンパスにて行った（11月6日）
 15. 学術振興会に2020年度科研費（研究成果公開発表B）計画調査など応募書類一式を送付した。（11月6日）
 16. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞（鈴木賞）候補者が理事会メール審議にて承認された（12月1日）
 17. 理事会より推薦された日本生態学会功労賞候補者3名（齊藤隆氏・可知直毅氏・甲山隆司氏）が代議員に承認され受賞決定となった（1月6日）
 18. 日本学術会議より令和2年10月の会員・連携会員の半数改選に向けて、会員・連携会員の候補者に関する情報提供の依頼があり6名の情報提供を行った（1月17日）
- * 他、各種集会への後援・共催名義使用承認5件、論文図表の転載許可6件

c. 会計報告（2018年4月～2019年3月）

1. 生態学会入門2版の印税として東京化学同人より275,520円が振込まれた（3月25日）
2. ESJ66会場使用料・設備使用料として神戸観光局に12,955,000円を支払った（4月2日）
3. ESJ66懇親会費用として神戸ポートピアホテルに2,909,871円を支払った（4月2日）
4. 2018年Ecological Research売上還元金としてSpringer社より1,944,000円が振込まれた（5月15日）
5. 障害対応およびサーバーサポートチケット代金として(株)MIERUNEに648,000円を支払った（5月23日）
6. ESJ66大会関連委託費として国際文献社に9,709,656円を支払った（5月13日）
7. 2019年3英文誌出版費用としてWiley社に870,000円を支払った（6月14日）
8. 科研費（国際情報発信力強化）前期分として7,000,000円の入金があった（7月10日）
9. 一般寄附金2万円の申込みがあり受け入れた（7月31日）
10. 国際文献社へ会員管理委託費4～6月3,116,825円を支払った（8月9日）
11. 東京化学同人より「生態学入門2版」印税として110,040円が振り込まれた（9月25日）
12. 土倉事務所へ日本生態学会誌69-1印刷費として756,000円を支払った（10月4日）

13. 土倉事務所へ日本生態学会誌69-2印刷費として885,600円を支払った（10月4日）
14. 土倉事務所へ日本生態学会誌別冊「フィールド調査における安全管理マニュアル」印刷費として1,054,080円を支払った（10月4日）
15. 土倉事務所へ保全生態学研究24-1印刷費として1,103,155円を支払った（10月4日）
16. 土倉事務所へニュースレターNo.48編集費として177,660円を支払った（10月4日）
17. 土倉事務所へニュースレターNo.49編集費として90,720円を支払った（10月4日）
18. 科研費（国際情報発信力強化）後期分として5,800,000円の入金があった（10月30日）
19. 国際文献社へ会員管理委託費7～9月251,941円を支払った（10月28日）
20. みずほファクターより2020年会費口座自動引落分として3,788,716円の入金があった（12月12日）
21. 国際文献社へ学会Web選挙運用費217,800円と地区会Web選挙システム構築費および運用費666,600円を支払った（12月20日）
22. 東京化学同人より「生態学入門2版」の印税として362,320円の入金があった（12月25日）
23. 学術著作権協会より2019年度複製使用料分配金として251,906円の入金があった（12月26日）
24. 土倉事務所へ日本生態学会誌69-3印刷費として1,240,965円を支払った（1月8日）
25. 土倉事務所へ保全生態学研究24-2印刷費として839,025円を支払った（1月8日）
26. 2019年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。（1月25日）
27. 国際文献社へ会員管理委託2019年10-12月経常費用1,067,487円を支払った（1月28日）
28. 2019年法人税として563,400円を納税した（1月30日）

2. 大会企画委員会

○一般講演・各種集会開催状況

回	開催地	ポスター	口頭	合計	ポスター 一般講演	高校生 シンポ	フォーラム	企画集会	自由集会	集合同計
59	大津*	1130	277	1467	35	26	5	20	32	83
60	静岡	894	211	1105	26	13	6	17	36	72
61	広島	944	214	1158	55	17	7	25	30	79
62	鹿児島	866	166	1032	29	12	11	19	29	71
63	仙台	949	243	1192	40	4	13	24	37	78
64	東京	955	264	1219	52	14	9	17	35	75
65	札幌	899	216	1115	45	19	7	17	29	72
66	神戸	918 [#]	269 [#]	1187	81	21 ⁺	12	-	32	65
67	名古屋	928 [#]	295 [#]	1223	60	31 ⁺	7	-	29 ⁺⁺	67

* EAFES 合同 # うちポスター賞応募496件 # うち英語賞応募56件 ++ うち分子生物学会との共同企画 1

- 大会準備（名古屋大会準備での新規重要部分）
概ねスケジュール通りに進んだ。
ポスター数(審査数ともに)500枚という上限を設けた。
懇親会での未成年者の扱いを明文化。
フォーラムに関するルールが明文化され、それにしたがって準備が進められた。
大会申込システムの改修が(対応可能な範囲で)概ね完了した。
3月4日大会企画委員会を zoom で実施。

○大会改革

- ESJ66 神戸大会で実施された大会改革をすべて踏襲。
【】は今大会での改善
申し込み、プログラムの完全日英併記化【申し込みマニュアルの英語版作成】【ページ数削減の工夫】
- ・申し込み締め切りの一本化【支払も方法によらず一本化】
- ・その他踏襲 企画集会を廃止し、自由集会 90 分に一本化 / 自由集会聴講券を導入 / 生態学会会費 2.12 まで / 申し込みシステム当日 23:59 まで稼働 / スピーカーレディールーム設置 / 分子生物学会との連携による共同企画の受付 / シンポジウム事前申込廃止、ER 招待シンポジウム 8.31 締切で事前申込 / EPA 事前申込廃止 / 口頭発表事前登録廃止 / プログラム事前配送廃止

○申し送り事項

- ・企画委員会内規の原案を作成した。次期検討。
- ・分子生物学会との学会連携が終了(2020.3.31)
- ・企業協賛(出展・プログラム広告)、EPA / 高校生ポスター景品提供、大会ウェブバナー広告
担当によって対応が異なる。学会としての統一ポリシーが必要
- ・危機管理マニュアルの事前策定
学会専務理事の確認を得て、12月・2月の理事会に報告(今回は遅れた)
危機管理委員会には、大会企画委員会の副委員長・運営部長も参画した方が良い(オブザーバ可)
- ・問い合わせ対応の確認(フォームオープン時に、文献社・部会長との分担)
- ・集会企画に対する対応(地区大会の活用や招待講演条件の緩和)、各種賞の申し込み制限を1年延長等
(文責:内海俊介)

3. Ecological Research 刊行協議会

【総会に報告すべき事項】

1. 出版状況

- 第34巻の6号(計879ページ98 articles)を出版。投稿数307、受理数90(採択率33.5%)。
- ・投稿数は2017年の最高値(536)以降は減少。主要因は中国からの投稿減少(158→67)。
- ・日本からの投稿数(83)は増加(特集やData Paperの影響)、採択数は最多(36)。
- ・投稿から掲載までは平均286日。前年値(297)より改善。

- ・IF値(2018)は1.546に上昇(2017年1.531、2016年1.283)。
- 2. プロモーション
 - ・Twitterで掲載論文やEcological Research関連情報の発信を開始(@EcologicalRes)。
 - ・イギリス生態学会大会(2019.12.10-13, Belfast)で3誌合同ブースを出展し、情報発信を実施。
- 3. Ecological Research Award 2019 受賞論文選考
 - ・編集委員・幹事の投票により4論文を選考し、理事会の承認を経て決定した(授賞式参照)。
- 4. 編集体制
 - ・編集長、副編集長、編集幹事の一部、編集委員一部を交代。
- 5. 特集企画(計画)
 - ・35巻1号、2号に特集掲載。その後掲載予定4件、企画段階3件。
注)さらに企画を随時募集しております。事務局宛にご相談ください。
- 6. 生態学会各賞受賞記念論文(総説)、ERシンポジウム論文(総説)の掲載計画
 - ・未投稿の既受賞者・シンポ企画者に再度投稿を依頼(受賞者は総説を投稿する原則)。
注)本年の各賞受賞者の皆様には、速やかな投稿をお願いします。

【総会の報告を要しない事項】

- ・Graphical Table of Contents(GTOC)の例をEcological Research 誌サイトにて公開。
- ・http://www.esj.ne.jp/er/gtoc/gtoc_examples_v1.pdf
- ・Data Paperの出版形態を変更。35巻4号掲載予定のData rescue 特集からData descriptorとしてメタデータを全文掲載の予定。
- ・Author Guidelinesの改訂(軽微な変更):Willy社のPreprint policyの変更により、これまでは新規投稿論文をプレプリント(査読前原稿)としてアップロードすることを非営利のサーバーのみ許容していたが、その限定が解除されたため、non-commercialの文言を削除した(Author Guidelinesの項目5)。また、論文出版後のプロモーションサービスが新しくなったため、該当するArticle Promotion Supportの文章が変更された(Author Guidelinesの項目8)。
(文責:陶山佳久)

4. 日本生態学会誌刊行協議会

編集状況

査読付き論文（原著、総説、特集）と査読なし記事（学術情報、学術情報特集、意見、連載）の原稿数

受付年	原著・総説論文				特集論文（特集数）				学術情報	学術情報特集	意見	連載
	投稿	審査	却下	受理	投稿	審査	却下	受理				
2020	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
2019	6	3	1	2	11(2)	5(1)	1	5(1)	3	11(2)	1	7
2018	4	0	2	2	12(2)	0	0	12(2)	1	6(1)	0	7
2017	11	0	5	6	7(1)	0	0	7(1)	2	0	1	4

70 巻 2 号（2020 年 7 月）学術情報特集：DNA メタバーコーディング、環境基本法を予定

70 巻 3 号（2020 年 11 月）特集：環境保全型農業を予定
リニューアルに向けた検討事項

再利用ライセンスや著作権などおよび投稿規定

発行の回数・形式や論文・記事の構成

（文責：永光輝義）

5. 保全生態学研究刊行協議会

オープンアクセス化を進めている

- ・J-Stage のパスワードによるオンラインアクセス制限を廃止 <2019 年夏>
- ・早期公開により年 2 回発行による時間遅れをなくす <2019 年秋>
- ・会員・購読者以外の投稿も受け付ける。ただし本会会員は規定ページ数までの掲載料を免除 <投稿規定改定により 2020 年 4 月から予定>
- ・論文の再利用を CC BY とする（正しく引用すれば図に補助線などを加えて教科書に利用できる）<投稿規定改定により 2020 年 4 月から予定>

オープンアクセス学術誌としての保全誌の立ち位置

生態系に関わるさまざまな応用分野の研究者や行政・コンサルタントなどの実務家のひとたちが、応用生態学の専門情報の取得と発表を行うオープンなプラットフォームとする。応用分野の雑誌は農地周辺、森林、都市や公園、河川と海岸、海の漁場などに細分化されているが、それぞれの生態系で働いている生態学的過程には共通のものも多い。OA 化された保全誌は、誰でも読み、誰でも投稿することができるメディアとして、これらの場所での生態学的過程を統一的にあつかうプラットフォームとなる。

編集状況

1. 2019 年 1 月～12 月（2020 年 3 月 2 日現在）

	1 原著論文	2 総説	3 調査報告	4 実践報告	5 解説	6 保全情報	7 意見・その他	計
2019 新規投稿	14	3	7	1	2	1	6	34
2019 年投稿 →受理	3	1	2	0	2	1	3	12
2019 年投稿 →却下・取下げ	1	0	0	0	0	0	0	1
審査中	10	2	5	1	0	0	3	21

2. 2018 年

	1 原著論文	2 総説	3 調査報告	4 実践報告	5 解説	6 保全情報	7 意見・その他	計
2018 新規投稿	8	3	9	3	0	1	1	25
2018 年投稿 →受理	7	3	6	3	0	1	1	21
2018 年投稿 →却下・取下げ	1	0	3	0	0	0	0	4
審査中	0	0	0	0	0	0	0	0

2017 年新規投稿数 29 編：受理 25 編，却下・取り下げ 4 編

2016 年新規投稿数 43 編：受理 31 編，却下・取り下げ 12 編

（文責：小池文人）

6. 自然保護専門委員会

日時：2020 年 2 月 23 日（日）11:55-2020 年 3 月 3 日（火）00:00

場所：書面（メール）による電子開催（メール会議）

参加委員：全 33 名

オブザーバー：可知理事（自然保護担当）

【審議事項】

1. 次期役員の選出について

吉田委員長より、原案が示され、投票が行われた。その結果、賛成 27 票、反対 0 票、意思表示なし 6 票となり、賛成多数で以下の通り原案が認められた。

委員長候補 和田直也（富山大・中部地区会／現自然保護専門委員会副委員長）

副委員長候補 奥山雄大（国立科学博物館・関東地区会）

副委員長候補 大久保奈弥（東京経済大学・海洋担当）
幹事候補 神山智美（富山大・環境法担当）

また、各地区会から地区選出委員について以下のような交代の連絡があり、承認された。

北海道地区会 紺野康夫→長谷川功

中部地区会 須賀丈→増田理子

中国・四国地区会 井上雅仁→岡浩平

九州・沖縄地区会 逸見泰久・伊澤雅子・内貴章世→久保田康裕・高嶋敦史・平田令子

2. 2019 年度事業報告及び決算について

吉田委員長より報告及び説明がなされ、賛成多数（27 票）により原案通り認められた。屋久島の照葉樹林保護に関する要望書については、第 9 号議案として理事会議事録に記載された通り、日本生態学会が単独で関係機関へ提出することになり、当委員会としても協力して取り組んでいくことを確認した。

3. 2020 年度事業計画及び予算について

吉田委員長より原案が示され、賛成多数（27 票）により承認された。

4. 自然保護専門委員会 HP の作成について

吉田委員長より原案が示され、賛成多数（27 票）により承認された。内容等の詳細については、後日改めて審議することになった。

5. その他

計画的・有効的な予算の執行方法について改善点が指摘され、次年度に反映させることになった。

【報告事項】

1. 自然保護専門委員会活動報告（2019 年度）

吉田委員長より、資料に基づき報告がなされた。

2. 作業部会・アフターケア委員会報告

以下のアフターケア委員会活動について報告がなされた。

- ・淀川問題検討委員会アフターケア委員会
- ・濃飛横断自動車道路アフターケア委員会
- ・石狩海岸風車建設事業計画アフターケア委員会
- ・尖閣諸島鳥釣島アフターケア委員会
- ・辺野古・大浦湾の埋め立て中止を求める要望書アフターケア委員会

3. その他

加藤委員より第67回大会フォーラム「サンゴ礁生態系の保全と再生を考える」が中止になったことを受けて、どのような活動をしていけば良いのか、意見を求める提案がなされた。

(文責：吉田正人)

7. 外来種検討作業部会

【ヒアリ対策】

2020年2月4日 環境省・ヒアリ防除等に関する専門家会合

■専門家

岸本 年郎 ふじのくに地球環境史ミュージアム教授
五箇 公一 国立環境研究所生態リスク評価対策室長
坂本 洋典 国立環境研究所生態リスク評価対策室研究員
辻 和希 琉球大学農学部・鹿児島大学大学院連合農学研究科教授
橋本 佳明 兵庫県大学自然環境科学研究所准教授

① 2019年9月東京都品川区青海埠頭にて野生化コロニーが発見されたのを受けて、今後の防除対策について協議

- ・都内周辺地域におけるモニタリング手法の提案
- ・ベイト剤を活用した防除手法の提案
- ・普及啓発・キャパシティビルディングの提案

② 全国レベルの早期発見・早期防除体制について協議

- ・専門家と連携した防除技術（調査手法、薬剤等）の開発・向上
- ・中国との連携・協議の継続、日中韓環境大臣会合（TEM）や生物多様性条約（CBD）の議論の場を活用した国際連携の継続・強化の検討
- ・コンテナの点検・清浄化等、事業者による対策の促進を検討
- ・港湾環境の整備

③ 防除対策に資する研究支援

- ・環境研究総合推進費 2019年度開始課題【4-1905】「外来アリ類をモデルとした侵略的外来生物管理体系の構築」（課題代表：辻 和希）

【外来生物法見直し】

2020年2月26日 環境省・第1回外来生物法施行状況評価検討会開催

外来生物法の点検の時期を迎え、侵略的外来種への対策において、対象種の選定と事業の実施内容の現況を把握・検討する必要がある。

① 選定に関する指摘事項

●「原則として概ね明治元年以降」に過剰に拘束されずに指定を進めること。

Ex. 近年、各地で有害化しているハクビシンなど

●DNAなど分析技術の進展に鑑み、外見上の判別の困難さを不選択の理由としないこと。

Ex. チュウゴクオオサンショウウオや大陸産スイゲンゼニタナゴ近縁種など

●国内不在が前提の未判定外来生物は国内規制のない状況を改善すること。

Ex. ミステリークレイフィッシュ等、未判定ザリガニ類の国内流通

●上位分類群で指定できる仕組みを活用すること。

Ex. 上記、未判定外来生物の抜け穴問題を解決できる
Ex. 個別的な未判定外来生物の輸入申請への対応が時間不足等の問題に直面

●植物防疫の検疫有害動植物種の指定解除傾向に対して、適切なフォローをすること。

Ex. スクミリングガイの植物防疫指定解除、生物農薬（除草剤）としての利用拡大

●特定外来生物に侵入分布状況に応じた複数のカテゴリーが必要。

a 侵略性が高いが指定が難しい外来種

Ex. アカミミガメ、アメザリへの対応：輸入および行為の一部を禁止できないか

b 緊急性の高いもの

Ex. 種の保存法では「緊急指定種」が設けられているので同様のイメージ

c 地域性の高いもの

Ex. アシナガキアリ等、地域で侵略性が異なる種の地域指定もできればよい

② 防除に関する指摘事項

●雑草化した植物に農業現場で適切に防除ができるよう、運用面での工夫が必要。

Ex. ナガエ、オオバナなどの防除行為が法律違反となる可能性

●科学調査・記録用の個体の取扱いに対しても、規制の適用除外を検討すること。

Ex. 研究者が標本用に持ち帰る行為も、厳密には規制される対象となる。

●防除確認・認定の手続きが不要な活動（特に外来魚）の実態把握が必要。

Ex. バス・ギルの駆除は各地で進んでいるが、国では把握できていない可能性。

●外来魚が野外での積極的利用が容認されている状況に対する啓発的取組が必要。

Ex. 漁業権指定4湖や管理釣り場、種苗生産業者などの問題とも関連。

③ 主流化に向けて

●都道府県での条例化等の取組が進むよう促す、国の強いリーダーシップが必要。

●生態系被害防止外来種リストの普及啓発が不足しており、積極的努力が必要。

●農林水産省と共通する課題が多く、緊密な省庁連携が

必要。

[IPBES]

IPBESにおいて、「侵略的外来種が与える多面的な影響の世界的評価」が行われており、評価報告書を2023年に出版予定である。その第一回執筆者会議が2019年8月19日から23日までつくば国際会議場にて行われ、日本から4名の研究者が参加した（所属：国立環境研究所、森林総合研究所、北海道大学、農業・食品産業技術総合研究機構）。報告書ゼロ稿が2019年末に完成し、内部評価を経て、現在初稿を執筆中である。

（文責：五箇公一）

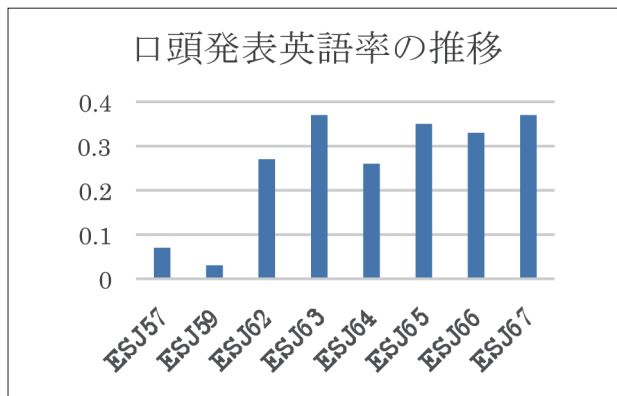
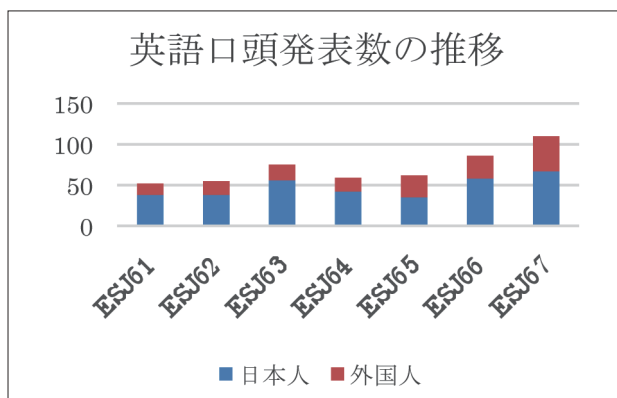
8. 将来計画専門委員会

1. 学会の国際化について

ESJ61より英語口頭発表賞が導入されて以来、順調に英語の口頭発表数は増加し、口頭発表における英語発表率も着実に上昇してきた（下図）。一定数の英語発表を担保するという意味では学会の国際化は数的に成功したといえる。しかし、大会中に外国人と日本人参加者の研究交流が十分なされているとは言えず、真の国際化には至っていない。今後は、大会に参加している外国人と日本人間の交流を触発するための新しい取り組みを検討するとともに、英語口頭発表賞部会の負担軽減など運営の効率化に向けた対応策を練る。

2. 次世代育成

引き続き、若手育成にも力を入れる。次年度からは大学院生にも委員会オブザーバーとして参画いただき、生



態学分野で研究者としてのキャリアを築くための支援方針について共同で検討する。

3. 委員の交代

奥田昇委員の異動により地球研代表の将来計画専門委員を石井励一郎氏に交代する。その他、新委員として鈴木俊貴氏に参画いただいた。

（文責：佐竹暁子）

9. 生態教育専門委員会

総会に報告すべき事項

1) 生態学教育専門委員会の公開

2020年度の生態学会岡山大会より、生態学教育専門委員会を公開する。生態学会員ならだれでもオブザーバーとして参加できるので、生態学教育に興味のある会員はぜひご参加いただきたい。

2) 2020年度活動計画

- ①「生態学入門第2版」の改訂
- ②SSH生徒研究発表会での日本生態学会の広報
- ③合宿開催
- ④連載「生態教育の今と未来」の運営
- ⑤生態教育支援データベースの運営
- ⑥日本生態学会岡山大会でのフォーラム企画

総会の報告を要しない事項

1) 2019年度活動報告

- ①「生態学入門第2版」の改訂（「詳細は、*生態学入門第2版」の改訂についての補足説明を参照）
- ②SSH生徒研究発表会での日本生態学会の広報
- ③合宿開催（2019年8月31日～9月1日、於三重大学）
- ④連載「生態教育の今と未来」の運営
- ⑤生態教育支援データベースの運営
- ⑥日本生態学会大会でのフォーラム企画

*「生態学入門第2版」の改訂についての補足説明

発刊から7年が過ぎ、東京化学同人から改訂を薦められた。合宿及びその後のメーリングリストでのやり取りで、以下のように方向性が決まった。

- ①現行の「生態学入門第2版」の読者層は、高校生物教員や、生態学を専門科目として学ぶ学部生だが、複数の委員から、現行本では内容も文章も難しすぎるとの指摘があった。
- ②一方、東京化学同人からは、多くの大学で教科書として使われており、難しすぎるとの声は届いていない、容易すぎる内容にはしないほしいとの依頼があった。
- ③そこで、当委員会としては以下の2つの方向性で臨むことにしたい。
 - 1) 入門編と上級編を分け、2段階レベルの教科書を検討する。
 - 2) 入門編の読者層は、高校生で受験の選択生物（4単位）を学んでいないものの、学部卒業後は生態学や環境に関連する進路を考えている学部1、2年生向けにする。執筆は当委員会が編集委員会を務め、生態学を専門としない高校生物教師に査読を依頼

し、内容を平易にする。国語表現についてはプロの日本語エディターに見てもらおう。

- 3) 一方、上級編の読者層は大学院生を対象とし、専門性の高い内容にしたい。新たな編集委員会を立ち上げるところまでは、当委員会がイニシアティブをもつ。

なお、東京化学同人は、現行「生態学入門第2版」は出版し続けるとのことであった。

(文責 畑田 彩)

10. 生態系管理専門委員会

2020年3月4日 15～17時 Zoom 会議

出席者

旧委員：鎌田、西廣、橋本、西田、白川、山下、松田、津田

新委員：赤石、伊藤、小笠原、吉田、高川、赤石、高川、上崎、上野、大脇、古田、中静、佐々木

議事録

1. 報告

- (1) 2019年度生態系管理演習の実施について

資料1に基づく報告が行われ、今後の講習会・演習に関する意見交換が行われた。

- (2) 次期体制について

次期体制についての経緯を確認するとともに、参加者による自己紹介を行った。理事会提案時から所属の変更があった委員について、最新の所属名称を確認した。

2. 議題

- (1) 2020年度からの委員会運営方針

- 1-1) 全体の活動方針

資料3に基づいて活動方針の提案、議論を行った。内規の改正に向け、継続して議論することとした。また3-5年程度を想定した中期計画を立てて活動することが合意された。

- 1-2) キャパシティビルディング部会の活動方針

今年度の活動の方針が提案され、2020年も生態系管理演習を実施すること、講習会（講演会）についても検討することが合意された。

- 1-3) 調査・提言部会の活動方針

NBS（Nature Based Solutions）に関する政策提言論文の提出を検討する方針が合意され、今後、省庁の動向やIUCNの提言等について情報を収集しつつ、勉強会や会合を進めることが合意された。

(文責：鎌田磨人)

11. 大規模長期生態学専門委員会

日時：2020年2月26日～3月4日

方法：委員間のメール交換による

出席者：村岡裕由（岐阜大学）、松崎慎一郎（国立環境研）、木庭啓介（京都大学）、石原正恵（京都大学）、大手信人（京都大学）

大規模長期生態学関連諸組織の活動状況報告

国際長期生態学研究ネットワーク（ILTER）/日本長期生態学研究ネットワーク（JaLTER）について（村岡）

- ・ ILTER Open Science Meeting/Coordinating Committee を開催（2019/9 ライプツィヒ、ILTER 代表：柴田英昭）。2018年から作成されてきた ILTER Strategic Plan が採択、活動計画策定に着手。<http://www.ilter-2019-leipzig.de/>

- ・ JapanFlux と JaLTER の連携による陸上生態系観測構想について第8期地球観測推進部会会議（2019年9月）にて話題提供した（市井和人@千葉大、柴田英昭@北大、村岡裕由@岐阜大）。

地球観測に関する政府間会合（GEO）について（村岡）

- ・ 第16回本会合および閣僚級会合がキャンベラで開催され、2020—2022 GEO Work Programme が採択された（2019年11月）。アジア生物多様性観測ネットワーク（APBON）はアジア・オセアニア GEO の活動として登録。APBON は2018年から次期10年活動計画を立案し2019年末までに完成。

Global Lake Ecological Observatory Network（GLEON）について（松崎）

- ・ GLEON は、国際的な湖沼を対象とした観測ネットワーク。
- ・ 多くの提案プロジェクトが進行。いくつかのプロジェクトに参加している（国環研・松崎）。
- ・ 湖沼の長期底層溶存酸素量（Jane et al. in submission）
- ・ 暴風が湖沼に与える影響レビュー（Stockwell et al. 2020. GCB）
- ・ 湖沼の溶存態炭素循環
- ・ 湖沼の水温・結氷記録のデータ収集
- ・ マイクロプラスチック <https://gleon.org/research/projects>

マスタープラン（第24期学術の大型施設計画・大規模研究計画）について（木庭・中野）

- ・ JaLTER と京大生態研センターが中心となってマスタープランを立案・提出した。
課題名：「人新世における生物多様性科学の深化：アジアングリーンベルトの生物多様性維持機構解明と高生物多様性生態系設計へ向けた総合的研究」は、学術大型研究計画（マスタープラン、課題番号40）に採択されたが、重点大型研究計画には採択されなかった。

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-24-t286-1.html>

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t286-3-2-39-42.pdf>

JaLTER などを中心となって進めている森林動態への温暖化影響評価について（石原）

- ・ 全国演習林協議会などにも呼びかけて、全国の長期毎木調査データを横断的に解析し、地球温暖化による種組成の変化を検知しようという共同プロジェクトが、吉川徹郎（国立環境研）、日浦（北大）、中村（北大）、田中（JaLTER、筑波大）、石原（全国演習林協議会、京大）で進んでいる。

Future Earth, Transformations to Sustainability プログラムの活動について（大手）

- ・ 生態系、生物多様性科学的研究を内包する超学際的な研究プログラム、FE、T2S が走っている。2020/3

に京都で Future Earth, Governing Counsel, Advisory Committee meeting が予定されていたが新型コロナウイルスの感染症回避のため延期。

- ・これに併せて、京大 Future Earth 研究推進ユニット、地球研 Regional Centre for Asia を中心に企画されていた Future Earth 公開シンポジウム「近づく地球の限界点 - アジアにおける緊急アジェンダ」は中止。
<http://old.futureearth.org/asiacentre/ja/approaching-planetary-boundaries-urgent-agenda-asia>
- ・Belmont Forum/JST からのファンディングで、"Transformation As Praxis: Exploring Socially Just and Transdisciplinary Pathways to Sustainability in Marginal Environments (TAPESTRY)" が、日本、英国、ノルウェー、インドの研究者の共同で開始された。フィールドはインド・バンガラディシュ。
<https://t2sresearch.org/project/tapestry/>

新年度の活動計画

ILTER/JaILTER

- ・ILTER 東アジア太平洋地域ネットワークの第 13 回会合をバンコクで開催（2020 年 9 月）。
- ・JaILTER Open Science Meeting を和歌山（北大研究林）で開催（2020 年 10 月）。
- ・ILTER 総会をブラジリアで開催（2020 年 11 月）。

GLEON

- ・各プロジェクトが引き続き進行する。

森林動態への温暖化影響評価

- ・活動は引き続き進められ、データはデータペーパーとして公開予定。

Transformation to Sustainability (T2S)

- ・Midterm meeting が Delft（オランダ、1 to 5 June 2020）で開催予定。

（文責：大手信人）

12. 野外安全管理委員会

日 時：2020 年 3 月 3・4 日 メールにて実施

参加者：飯島、石原、大館、奥田、粕谷、北村、鈴木

2019 年度活動報告

- ・野外調査安全管理マニュアル出版。日本生態学会誌の伊東編集委員長はじめ、多くの方にご尽力をいただいたことにお礼申し上げます。
- ・66 回大会でのランチョンセミナー、ポスター掲示
神戸大会でランチョンセミナーを実施。参加者は約 50 名。アンケートの結果、参加者の大半が学部生で有用だったと回答。ポスター縮刷版の希望があり送付。
- ・67 回大会でのランチョンセミナーとポスター展示の準備を進めた。

2020 年度活動予定

- ・委員長の交代。新委員長として石原道博氏を選出した。
- ・68 回大会でのランチョンセミナーとポスター展示の準備を行う。
- ・フォーラム内の動画配信の検討を引き続き行う
フォーラムで扱っている内容を動画化し、インターネット公開に向けて
検討と準備を進める

・事故情報の収集と集約

引き続き、野外調査、実習中の事故や冷やりハッと事象の例を収集し、解析を続ける。該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。

（文責：鈴木準一郎）

13. キャリア支援専門委員会

メール審議：2 月 26 日～29 日

2019 年度活動報告

1. 名古屋大会での企画（※ 全て中止）

- ・合同フォーラム（U04 3 月 6 日 15:00-16:30, Room O）
- ・「生態学会の将来を考える - 学会構成員とジェンダーの視点から」
- ・キャリア支援相談室（3 月 7 日 9:30-17:00 N237 号室）
- ・企業等のパンフレット配架用スペース（大会期間中、会場内に設置）
- ・こども生態学講座（3 月 7 日 9:30-16:00 N234 号室）
- ・託児所・ファミリー休憩室

今回は実行委員会に委員が入ったことで、スムーズに事が運べた。

2. その他

- ・各種統計情報の和文誌化

生態学会和文誌に以下の学術情報特集への投稿を企画（2019 年度中の投稿を予定していたが、次年度に持ち越し）

- ①会員データ、②男女共同参画学協会連絡会による大規模アンケート、③大会参加者の属性データ

来年度の活動計画

1. 来年度の委員（任期：2020.3 - 2022.3；下線は新委員）
委員長：上野裕介、副委員長：木村恵（男女共同参画）、鈴木牧（キャリア支援）
委員：河内香織、小山耕平、鈴木智之、曾我昌史、西田貴明、沼田真也、水野晃子、森田健太郎、高田まゆら（中央大）、成田あゆ（北海道立林業試験場）、高野宏平（長野県環境保全研究所）、宮脇成生（建設環境研究所）
オブザーバー：可知直毅、黒瀬奈緒子、塩尻かおり、富田基史、半場祐子、別宮（坂田）有紀子、三宅恵子、荒木希和子、中坪孝之、宮下 直
2. 岡山大会での活動
 - ・キャリア支援フォーラム
 - ・キャリア相談ブース
 - ・企業パンフレットの配架
 - ・男女共同参画ランチョンフォーラム
 - ・こども生態学講座
 - ・託児室・ファミリー休憩室
3. その他の活動
 - ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年 4 回程度）
 - ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加（年 1 回）
 - ・理工チャレンジ（リコチャレ）
 - ・女子中高生夏の学校

- ・第4回大規模アンケート（第4回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査）の生態学会部分の解析と公表

（文責：宮下直）

14. 監査報告

一般社団法人 日本生態学会
監事 粕谷英一・陀安一郎

当法人の2019年度の事業計画、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

1. 監査の方法及びその内容

2019年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的には、すべての理事会に出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。また、2019年1月25日に学会事務局において会計書類を閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。

2. 監査の結果

- (1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
- (2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款に違反する重大な事実はない。
- (3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

15. 選挙の郵送投票廃止について

過去3回（2015年、2017年、2019年）の選挙で郵送投票の希望者がなかったため、理事会にて選挙の郵送投票廃止を会員に提案することになった。

<スケジュール>

1. 2020年3月総会（名古屋）にて郵送投票廃止を提案
2. 総会後 HPでの告知など会員からの意見を募る。
3. 会員の意見をもとに廃止する場合は2021年総会（岡山）にて規則変更提案。

<郵送投票に関する規則の記載>

役員・代議員選任規則 <https://esj.ne.jp/esj/Rule/Election.html>

（投票の方法）

第18条 有権者は選管委から送付された投票用紙に、候補者の氏名を自書し、署名した所定の返送用封筒に入れ、これを選挙の期日の午後5時までに必ず到着するよう、直接、選管委宛に 郵送若しくは電磁的記録にて投

票する。

（投票の無効）

第19条 次の各号の投票は、これを無効とする。

- (1) 定足数を超えて投票された場合はその超えた分の投票
- (2) 連記投票において、同一の被選挙権有権者の氏名を重複して記載したもの。ただし、この場合は1票だけを有効として、他を無効とする。
- (3) 所定の投票用紙を使用しなかったもの
- (4) 候補者でない者の氏名を記載したもの
- (5) 記載した氏名を確認できないもの
- (6) 選挙の期日までに到着しなかったもの
- (7) 投票用紙返信用封筒の署名がないもの。あるいは、署名が投票者以外のものであると、代議員選管委で判定されたもの。

B. 審議事項

第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場意義なくこれを可決承認した。

- ・任期満了により退任する役員（任期：2018.3 総会後～2020.3 総会まで）

理事：占部城太郎、湯本貴和、中川弥智子、久米篤、吉田丈人、巖佐庸、丑丸敦史、内海俊介、大澤剛士、佐竹暁子、鈴木まほろ、陶山佳久、東樹宏和、中野伸一、西廣淳、宮下直、可知直毅

監事：粕谷英一

- ・理事会推薦役員候補者（任期 2020.3 総会後～2022.3 総会まで）

理事：湯本貴和（再任）、宮下直（再任）、中川弥智子（再任）、久米篤（再任）、木村恵、内海俊介（再任）、東樹宏和（再任）、中野伸一（再任）、吉田丈人（再任）、西廣淳（再任）、近藤倫生、辻和希、鏡味麻衣子、北島薫、宮竹貴久、村岡裕由、和田直也

監事：齊藤隆

（参考）上記以外の任期中の役員（任期：2019.3 総会後～2021.3 総会まで）

理事：永松大（専務理事）、三木健（庶務担当）、黒川紘子（会計担当）

監事：陀安一郎

- ・正会員の投票による理事兼代表理事・会長候補者：湯本貴和

第2号議案 2019年決算承認に関する件

当期（自2019年1月1日至同年12月31日）における決算案について満場意義なくこれを承認可決した。

2019年決算案（2019年1月1日～2019年12月31日）

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
費 目	19 予算	19 決算	費 目	19 予算	19 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	27,500,000	27,194,500	ER・PE・PSB	400,000	870,000
正会員（学生）	4,500,000	5,207,000	生態誌	3,000,000	3,661,645
賛助会員	1,500,000	1,578,000	保全誌	2,000,000	1,457,180
小 計	33,500,000	33,979,500	会誌発送費用	1,000,000	995,761
科研費			ニュースレター	300,000	347,760
国際情報発信強化 A	12,800,000	12,800,000	英文校閲・翻訳	500,000	397,418
公開講演会	1,200,000	0	ER誌 Open Access 経費	3,000,000	3,368,054
小 計	14,000,000	12,800,000	和文誌編集費	500,000	498,001
学会誌売上げ	700,000	1,177,600	小 計	10,700,000	11,595,819
出版印税	1,000,000	753,112	会議費	100,000	55,507
広告代	180,000	210,000	旅費・交通費	3,000,000	2,779,189
著作権使用料	300,000	268,754	人件費	16,000,000	17,836,825
大会収入	25,600,000	25,441,400	地区会活動費	3,000,000	3,120,903
講習会費	100,000	189,000	大会支出	28,300,000	27,958,563
寄附金	0	20,000	公開講演会	1,400,000	1,400,000
その他	2,000	1,947,004	個体群生態学会出版企画費	350,000	336,759
前年度繰越金	79,429,471	79,429,471	INTECOL 会費	1,350,000	0
			事務費		
			通信費	400,000	367,557
			消耗品費	200,000	193,245
			雑費	300,000	381,734
			決済代行手数料	900,000	911,134
			サーバ関連費	500,000	787,191
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小 計	3,980,000	4,320,861
			各種委員会費	1,500,000	1,591,503
			選挙費	300,000	222,884
			EAFES 費用	200,000	239,500
			講習会費	200,000	251,982
			会員管理委託費	4,600,000	4,715,466
			大会システム改修費	1,320,000	1,317,600
			法人税	400,000	563,400
			次年度繰越金	78,111,471	77,909,080
合 計	154,811,471	156,215,841	合 計	154,811,471	156,215,841

単年度収入 75,382,000 76,786,370

単年度支出 76,700,000 78,306,761
 単年度収入 - 支出 -1,318,000 -1,520,391

<特別会計>
賞準備金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	19 予算	19 決算		19 予算	19 決算
前年度繰越金	12,565,064	12,565,064	賞金		
預金利息	0	104	宮地賞	222,740	211,370
			大島賞	222,740	222,740
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	645,480	634,110
			雑費	4,320	3,250
			次年度繰越金	11,915,264	11,927,808
合 計	12,565,064	12,565,168	合 計	12,565,064	12,565,168

貸 借 対 照 表

2019 年 12 月 31 日現在

一般社団法人 日本生態学会

(単位：円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資 産 の 部)	円	(負 債 の 部)	円
流 動 資 産		流 動 負 債	
現 金 及 び 預 金	119,723,150	未 払 金	4,088,000
前 渡 金	1,186,408	未 払 法 人 税 等	563,400
前 払 費 用	198,298	前 受 金	33,036,600
		預 り 金	531,976
固 定 資 産		固 定 負 債	
特定資産 学会賞準備金資産	11,927,808	退 職 給 付 引 当 金	4,978,800
		負 債 合 計	43,198,776
		(正 味 財 産 の 部)	
		一 般 正 味 財 産	77,909,080
		指 定 正 味 財 産 (う ち	
		特定資産への充当額)	11,927,808
		正 味 財 産 合 計	89,836,888
資 産 合 計	133,035,664	負 債 ・ 純 資 産 合 計	133,035,664

第3号議案 2020年度予算承認に関する件

次期（自2020年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場意義なくこれを承認可決した。

2020年予算案（2020年1月1日～2020年12月31日）

<一般会計>

収 入			支 出		
費 目	19 決算	20 予算	費 目	19 決算	20 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	27,194,500	27,000,000	ER・PE・PSB	870,000	900,000
正会員（学生）	5,207,000	5,000,000	生態誌	3,661,645	3,000,000
賛助会員	1,578,000	1,400,000	保全誌	1,457,180	2,000,000
小 計	33,979,500	33,400,000	会誌発送費用	995,761	1,000,000
科研費			ニュースレター	347,760	350,000
国際情報発信強化 A	12,800,000	12,600,000	英文校閲・翻訳	397,418	500,000
公開講演会	0	1,300,000	英文誌 Open Access 経費	3,368,054	3,600,000
小 計	12,800,000	13,900,000	和文誌編集費	498,001	500,000
学会誌売上げ	1,177,600	1,000,000	小 計	11,595,819	11,850,000
出版印税	753,112	700,000	会議費	55,507	350,000
論文掲載料		120,000	旅費・交通費	2,779,189	2,800,000
広告代	210,000	180,000	人件費	17,836,825	18,000,000
著作権使用料	268,754	250,000	地区会活動費	3,120,903	2,220,000
大会収入	25,441,400	24,000,000	大会支出	27,958,563	24,000,000
講習会費	189,000	200,000	公開講演会	1,400,000	0
寄附金	20,000	0	個体群生態学会出版企画費	336,759	350,000
その他	1,947,004	2,000	INTECOL 会費	0	1,800,000
前年度繰越金	79,429,471	77,909,080	事務費		
			通信費	367,557	500,000
			消耗品費	193,245	350,000
			雑費	381,734	350,000
			決済代行手数料	911,134	900,000
			サーバ関連費	787,191	800,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小 計	4,320,861	4,580,000
			各種委員会費	1,591,503	1,100,000
			広報費		250,000
			選挙費	222,884	0
			EAFES 費用	239,500	200,000
			講習会費	251,982	200,000
			会員管理委託費	4,715,466	4,700,000
			大会システム改修費	1,317,600	0
			法人税	563,400	400,000
			次年度繰越金	77,909,080	78,861,080
合 計	156,215,841	151,661,080	合 計	156,215,841	151,661,080

単年度収入 76,786,370 73,752,000

単年度支出 78,306,761 72,800,000
 単年度収入 - 支出 -1,520,391 952,000

＜特別会計＞
学会賞準備金

収入の部			支出の部		
	19 決算	20 予算		19 決算	20 予算
前年度繰越金	12,565,064	11,927,808	賞金		
預金利息	104	0	宮地賞	211,370	400,000
			大島賞	222,740	200,000
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	634,110	800,000
			雑費	3,250	4,400
			次年度繰越金	11,927,808	11,123,408
合 計	12,565,168	11,927,808	合 計	12,565,168	11,927,808

第 4 号議案 第 70 回大会（2023 年）担当地区会に関する件

第 70 回大会（2023 年）担当地区会候補東北地区の提案があり満場意義なく承認可決した。

第 5 号議案 名誉会員に関する件

廣瀬忠樹会員・和田英太郎会員・重定南奈子の名誉会員推薦について提案があり満場意義なく承認可決した。

第 6 号議案 要望書提出に関する件

「高い植物多様性を擁する屋久島の低地照葉樹林の環境保全を求める要望書」提出について満場意義なく承認可決した。

高い植物多様性を擁する屋久島の低地照葉樹林の環境保全を求める要望（案）

屋久島の植物相は、低地の暖温帯から山頂部の冷温帯までの幅広い環境勾配に沿って、多様な植生の垂直分布が見られることによって特徴づけられます。事実、世界自然遺産登録の際にも、海岸から山頂部に及ぶ植物の垂直分布が特別視され、「堂々たる景観を呈するスギ林の存在」と合わせて「他地域でほとんど失われてきた暖温帯地域の原生林（低地照葉樹林）が特異に残存されていること」が重要視されました（参考資料 1）。近年、島内の主要河川沿いにおける林齢 150 年以上の原生的な低地照葉樹林を対象に精力的に実施された調査により、種の保存法で指定された国内希少野生動植物種を含む多くの絶滅危惧植物、ならびにヤクシマソウ、ヤクノヒナホシ、タブガワムヨウラン、ヤクシマヤツシロラン、タブガワヤツシロランなど、低地照葉樹林のみに生育する多数の菌従属栄養植物の新種や日本初記録となる種が見いだされています（参考資料 2）。屋久島の低地照葉樹林には、菌従属栄養植物以外にも、固有種が多数生育・生息しています。

このように屋久島の低地照葉樹林、とくに溪流沿いの照葉樹林周辺に絶滅危惧植物や希少植物が多産することは、植物学者の間ではよく知られた事実ですが、これまで環境省や林野庁の行政においては、その保全上の重要性が十分に認識されてこなかったものと考えられます。自然公園法においても、これらの地域の多くは国立公園地域に指定されておらず、保全の対象とされていない現

状があります。特に近年、楠川流域や一湊川流域、花揚川・鳴子川流域といった保全上重要な照葉樹林地において、隣接するスギ植林地の伐採に伴う林道、作業道の開設や治山ダム建設が相次いでおり、樹木の伐採や造成自体による生育地破壊、ならびに、その後の表土流出や乾燥化などにより、タブガワムヨウラン、ヤクシマヤツシロラン、タブガワヤツシロランなどの多くの絶滅危惧植物や希少植物が消失の危機に瀕しています（参考資料 3）。

一方でこれらの地域の大部分は屋久島の全面積の 80% を占める国有林内であることから、国立公園外であっても森林・林業基本法の理念にのっとり保全計画を立案する必要があると考えられます。例えば、森林・林業基本法では、森林・林業政策の基本理念として、「森林の有する多面的機能の発揮」を第一に規定し、多面的機能の中に「自然環境の保全」を位置づけています。森林・林業基本計画（平成 28 年 5 月閣議決定）においては、「生物多様性を保全する場としての森林の役割などを含めた多面的な機能の発揮が一層期待される」という現状認識の下で、生物多様性保全上重要な森林については「森林と人との共生林」に区分して、適切な保全をはかるという方針が設定されました（参考資料 4, 5）。また、生物多様性国家戦略 2012-2020 では、森林施業現場における生物多様性配慮の具体的施策について、「森林の有する多面的機能を発揮していくため、森林施業に際しての生物多様性の保全への配慮を推進」し、「国有林野においては、保護林や緑の回廊に設定されていない森林についても、その連続性を確保し、天然林は維持」する方針が示されています（参考資料 6）。屋久島の低地照葉樹林での施業においても、これらの方針に沿って、生物多様性への影響を評価し、適切な保全措置をとる必要があると考えられます。

こうした状況に鑑み、日本生態学会は、屋久島の低地照葉樹林における取り返しのつかない自然環境の悪化、および生物多様性の消失を防ぎ、この貴重な森林生態系を後世に引き継ぐことを願ってこの要望書の提出に至りました。

要 望

屋久島の低地照葉樹林は、世界遺産登録時の IUCN 評価書にも特筆される、日本国内外においても貴重な森林

であることを認識し、生物多様性国家戦略 2012-2020 をふまえ、林野庁、環境省、鹿児島県、屋久島町の関係諸機関の皆様以下に以下の点を要望します。

1. 林野庁におかれては、森林・林業基本法、森林・林業基本計画の趣旨にのっとり、生物多様性豊かな低地照葉樹林においてはその保全に配慮した森林経営に努めること。とくに重要と考えられる梶川流域や一湊川流域、花揚川・鳴子川流域などの溪流沿いの照葉樹林については、屋久島森林生態系保護地域への編入等、至急に保全措置を講じること。

2. 環境省におかれては屋久島の照葉樹林、とくに種の保存法の国内希少野生動植物種や絶滅危惧植物の多様性が高い低地河川流域の梶川流域、一湊川流域、花揚川・鳴子川流域などの溪流沿いの照葉樹林については、現時点での何ら保護の担保が無い現状に鑑み、国立公園地域の拡大、編入や、種の保存法にもとづく生息地等保護区指定などの保全対策に、早急に取り組むこと。

3. 鹿児島県及び屋久島町におかれては屋久島の低地照葉樹林の価値を等しく認識の上、生物多様性鹿児島県戦略等に準拠し、地域の自然資源の財産として恒久的な保全の策を講じるとともに、国の施策に協力し、とくに森林生態系の保全を重視し、林業事業との整合性に格段の配慮を払うこと。

4. 屋久島の低地照葉樹林やそれに隣接する地域での伐採、林道・治山ダム建設などの計画にあたっては、計画地域周辺の絶滅危惧植物や希少野生動植物種の分布状況を現地調査によって十分に把握した上で必要な環境配慮を実施すること。必要に応じて林野庁、環境省、鹿児島県、屋久島町などの行政と、地域関係者、市民、専門家が協議する場を設けること。日本生態学会は、絶滅危惧植物・希少野生動植物種の現地調査や協議の場への参加に対して、必要な支援を惜しみません。

以上決議する。

2020 年 3 月 7 日

第 67 回 一般社団法人日本生態学会大会総会

Ⅱ. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について

2020 年 3 月 7 日に 2020 年度第 1 回理事会が行われ代表理事（兼会長）業務執行理事が選任された。

1. 代表理事（兼会長）（任期 2020 年 3 月～2022 年 3 月）
湯本 貴和
2. 業務執行理事（任期：2020 年 3 月～2022 年 3 月）
宮下 直（副会長、次期会長候補）
中川 弥智子（広報担当）
久米 篤（出版担当）
木村 恵（男女共同参画 / キャリア支援担当）

Ⅲ. 功労賞受賞者

第 18 回日本生態学会功労賞

齊藤 隆（北海道大学）

可知 直毅（東京都立大学）

甲山 隆司（北海道大学）

Ⅳ. 書評依頼図書（2019 年 11 月～2020 年 2 月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 齋藤慈・平石界・久世濃子 編 長谷川真理子 監修「正解は一つじゃない 子育てする動物たち」(2019) 336pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063373-4
2. 羽山伸一著「野生動物問題への挑戦」(2019) 180pp. 東京大学出版会
3. 岡崎正規編「実践土壌学シリーズ 5 土壌環境学」(2020) 216pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-43575-7
4. Sakurai Ryo 著「Human Dimensions of Wildlife Management in Japan: from Asia to the world」(2019) 140pp. Springer ISBN:978-981-13-6332-0
5. Beatrice Frank, Jenny A. Glikman, Silvio Marchini 編「Human-wildlife interactions: turning conflict into coexistence」(2019) 456pp. Cambridge University Press ISBN:978-1-108-40258-3
6. 井上透監修・中村覚責任編集「デジタルアーカイブ・ベーシックス③ 自然史・理工系研究データの活用」(2020) 240pp. 勉誠出版 ISBN: 978-4-585-20283-7

Ⅴ. 寄贈図書

1. 「北海道爬虫両棲類研究報告書 Vol.7」(2020) 32pp. 北海道爬虫両棲類研究会

書 評

生物音響学会編 (2019) 「生き物と音の事典」朝倉書店 464pp. ISBN:978-4-254-17167-9 本体価格 15,000 円 + 税

溪流、山林、熱帯、海辺、海洋、市街など。どんな生態系でも耳をすませばそこは、いろんな音で満ち溢れているだろう。音の発信者は動物や人だったり水や空気のものだったりする。受け手がいるから発信者も存在する。

本書は「生き物と音」についての総合的な事典である。A4 版で 441 ページ、9 名の編集者、総勢 134 名の専門家によって執筆されたとても重厚な仕上がりとなっている。寝転んで読むにはちと重たいボリューム感だ。しかし、恐れるなかれ。本書は全編を通じてほぼ見開き 2 ページの読み切りの形で、生物音響についての面白いトピックが順序良く並んでいる。にもかかわらず、どのトピックからでも読み進められるようになっている。どの

ページを見ても飽きない工夫が編集者によって施されている。

事典というだけあって、話題の順序も生物音響一般の導入に始まり、ほ乳類、海洋生物、鳥類、両性爬虫類、魚類、昆虫類ほか、比較アプローチへと知識を集めた配列として本のストーリーが展開され、解説されていく。そのため一冊の本として最初から読み進めていっても楽しめた。生物音響学のエキスパートが総力をあげて仕上げた事典であり、内容は多岐にわたり、奥深く、なにより読んでいて面白い。

さて生態学会会員に向けて本書を紹介する意義のひとつに、この書籍の内容に群集生態学や保全生態学の観点があまりないことがあると僕は思う。言い換えると、音響群集生態学や音響保全生態学という分野があってもよさそうに思えたのだ。アコースティック・コミュニティ・エコロジーとでも言うのだろうか。野外に生息する鳥やカエルの個体数の大まかな把握には生き物の鳴き声に依る手法が実際に国内ではいくつか実施されている。だが生態系を織り成す複雑な群集構造を音響に基づいて調べる研究にはあまりお目にかからないように思う。

また本書では、食う・食われる、性選択など個体対個体の視点で書かれた興味深い生物音響の話題がかなり記述されているが、様々な生物種が混在する群集のなかで、音響がシグナルやコミュニケーションとしてどのような役割を担っているのだろうか。そこには大きな研究ニッチが（わが国では）開けているのかも知れない。気になって少し調べてみると、ハワイでは様々な生態系でレコーダーを仕掛けて鳥の群集と植生に関する調査が行われている（Boelman et al. 2007）。バイオアコースティクス技術を使った鳥類のフェノロジー・ダイナミクスの研究もあるようだ（Oliver et al. 2018）。

これは書評の依頼者から教えて頂いたのだが、ヨーロッパではEcoacousticsなる分野も立ち上がっていて保全生態学と音響生物学とのコラボが行われている。エコ生物音響国際学会なるサイトもある <https://sites.google.com/site/ecoacousticssociety/about>。覗いてみると年次大会も2014年から始まっている（世界は広いなあ）。

本書が世に出たことで、日本において群集生態学に生物音響学の知の蓄積を応用するメリットは大きいだろう。本書を読んでいただければわかることだが、生物音響学にはとりわけ比較アプローチを用いた生理学から得られた知識が濃厚に詰まっている。本書に盛り込まれた知識を武器として、広く生態学に応用できる可能性がある。これはドメカニズムが分かっているシステムについて、マクロな方向に対して研究を広げることとはとても興味深いことだろう。生理学と生態学は互いにもっと近寄ることで、新しい生物学が見えると僕は信じている。

世界の様々なところに振動はある。シグナルを伝達するのに媒体を振動させる、つまり音を使うというやり方がある。多くの生き物がこの方法によってシグナルを発し、あるいは受け取ることがわかる。音の発信メカニズムがあり、そして発信された音の受容メカニズムも存在する。いろんな分類群の生き物において音を受け取るシステム、つまりは耳の構造が似ていることは、このシス

テムも眼のように収斂によって進化してきたことをうかがわせる。本書では収斂についても、導入および終わりの章でも解説されている。

また本分野は最近では生物学の根幹を成すようになったゲノム研究にもあまり触れられてはいない。これも言い換えれば、発音と受容の分子メカニズムについて音響器官モレキュラー生物学という新しい研究分野に広がるかも知れない。

ということで、本書は読んでいて、音響生物学の研究者だけにとどまらず、この中に詰まった知識を武器として、よりミクロなゲノムや、あるいはもっとマクロな生態・環境の研究にまで新しい研究分野を拓く礎になるのではないかというワクワクした高揚を感じさせてくれた。

ぜひ多くの方々に手に取ってもらいたい。「ためになる本」です。

引用文献

Boelman N, Asner GP, Hart PJ, Martin RE 2007. Multi-trophic invasion resistance in Hawaii: bioacoustics, field surveys, and airborne remote sensing. *Ecological Applications* 17, 2137-2144.

Oliver RY, Ellis DPW, Chmura HE, Krause JS (他 5名) 2018. Eavesdropping on the Arctic: Automated bioacoustics reveal dynamics in songbird breeding phenology. *Science Advance* 4, DOI: 10.1126/sciadv.aag1084.

(岡山大学 宮竹貴久)

原正利 (2019) 「どんぐりの生物学—ブナ科植物の多様性と適応戦略—」 京都大学学術出版会 322pp. ISBN:978-4-8140-0208-5 本体価格 2,000 円 + 税

私たちにとって最もなじみのある木の実といえば、どんぐりを思い浮かべる方も多いのではないだろうか。老若男女、多くの人を魅了し、見つければ思わずポケットに忍ばせたいくなる木の実、どんぐり。そんなどんぐりを生産するブナ科植物は、日本はもちろん北半球を中心に広く様々な植生に出現するという。そのほとんどが高木で森林の樹冠を形成することから、生態的にも極めて重要な分類群である。本稿をお読みの方の中にもこれらの樹種を研究対象とする方が含まれているに違いない。また、直接扱っていないにしてもブナ科植物が研究対象種の餌であるとか、共生相手として密接に関わっているなどという方も多いのではないだろうか。ここで紹介する「どんぐりの生物学」は、私たちにとって馴染み深いブナ科植物について多数の文献をもとに、系統、形態、生態、植生と様々な角度から丁寧に解説した本である。公私ともに「どんぐり」に関わって生活している身としては、これは読まねばなるまいと手に取った次第である。

表紙には手のひらサイズの巨大なドングリ、クエルクス・インシグニスの写真、タイトルにはひらがなで「どんぐり」の文字とキャッチーな表紙であるが、中身はと

っても硬派である。まず第Ⅰ章「ブナ科植物の誕生と分化」では、化石の報告をもとに、ブナ科植物の誕生する白亜紀後期から各地質年代ごとにブナ科植物の特徴について説明がなされる。耳慣れない属名と専門用語で記述される形態要素に一抹の不安を覚えるかもしれないが(正直にいうと「どんぐり」というタイトルから安易に「ナラ、クヌギ、カシ」を想像して読み始めた私はここで少し戸惑った・・・)、気にせず読み進めて問題ない。第Ⅰ章で示された「ブナ科植物がたどってきた道」の概略は、続く第Ⅱ章「ブナ科植物の多様性」、第Ⅲ章「どんぐりの形態学」で豊富な写真、図とともに丁寧に解説されるからである。

第Ⅳ章「ブナ科植物の芽生え」ではブナ科植物の多様な芽生えの形態、発芽と発生順序について解説している。長い休眠を持たず、乾燥に弱いという科を通して共通した特徴を持つどんぐりだが、芽生えの形態は分類群によって大きく異なるという。また、芽生えの発生順序、タイミングも様々である。これらの情報を分類学的、生態学的観点でとりまとめ、多様である意味について考察されている。続く第Ⅴ章「どんぐりと昆虫」、第Ⅵ章「どんぐりと哺乳類・鳥類」ではどんぐりを食べる動物ついて紹介している。哺乳類や鳥類による被食は種子散布のメリットも伴うことから、これまで多くの研究がなされている。これらの章では、ブナ科植物がいかに多様な生物種に利用され、どんぐりと動物たちとの間で様々な攻防、駆け引きが行われているのかを知ることが出来る。また、第Ⅶ章「ブナ科植物と菌類」では、どんぐりや芽生えの生存と定着を考えるうえで欠くことのできない病原菌と菌根菌との関係について触れ、最終章の第Ⅷ章「ブナ科植物の分布と植生」では筆者である原正利博士が研究されてきたアジアの熱帯山地におけるブナ科の分布について解説している。

化石から探るどんぐりの辿ってきた道のり、熱帯に転がる巨大などんぐり、森の中での多様な生き様・・・身近に感じていたどんぐりの新たな一面を知ることのできる本書は、ブナ科植物研究の渾身のレビューとなっている。前半部で系統的、分類学的な視点からブナ科に属する植物の立ち位置を明らかにすることで、その後に紹介される生理的、生態学的な現象をより深く理解できる構成となっている。貴重な引用文献リストはもちろん、巻末の用語解説も充実しており、分野外の読者の理解を助けてくれるだろう。時折挟まれるコラムも、「世界最大のどんぐりは？」といった素朴な疑問から、数ページにわたって考察される「南西諸島の森とブナ科の植物」のように読み応えのあるものまで、著者の博物学的な視点で切り取られたどんぐり愛が紹介されている。

そろそろ、ブナ科植物の花の時期がやってくる。口絵に掲載された様々などんぐりの成長過程の写真と身近なブナ科植物の花を比較してみるのも面白いかもしれない。これからどんぐりへと成長する雌花を愛でながら、本書を片手に「どんぐりの沼」にはまってみてはいかがだろうか。

((国研) 森林研究・整備機構
森林総研 林木育種センター 木村恵)

金子修治・鈴木紀之・安田弘法編著 (2020)「博士の愛したジミな昆虫」岩波ジュニア新書 272pp.
ISBN:978-4005009169 定価 968 円

生態学の研究は、犯罪捜査に似ていてさらに難しい。似ている点は、ある生態事象(犯罪)が起こった後で、研究が始まることだ。難しい点は、そもそも今みている生態現象が犯罪の結果なのかどうかも分からないことや、過去を実験的に再現できないこと、あるいは犯人の候補があまりにもたくさんあってそのすべてを検証できないことだ。本書では、昆虫の群集を主な研究の対象として、こうした困難を乗り越えて、そこで生じる現象の原因(犯人)探しをする過程が生き生きと描かれている。研究がうまくゆけば、上質のミステリーを読むように、張り巡らされた伏線がうまく回収される知的なカタルシスを味わえる。

本書の構成を紹介する。第1章は、すみわけ、食べわけ、サバイバル!と題され、テントウムシのすみわけ(鈴木紀之)とモンシロチョウ属の寄主選択(大崎直太)、第2章は、共進化が生んだ「オンリー・ユー」で、ゾウムシとツバキの敵対的な共進化(東樹宏和)とアリ植物とアリの共生(村瀬香)、第3章は、敵か、味方か? 関係はフクザツなのだと題されて、寄生蜂と植物の化学物質を介した相互作用(塩尻かおり)と、アブラムシに随伴するアリとアブラムシの天敵との複雑な相互作用(金子修治)、第4章は外来種がやって来た!で、侵略的な外来アリと生物多様性(辻和希)と外来昆虫の侵入先での適応(田中幸一)、最後の第5章は、多様なムシの集まり、食うか食われるか!であり、農業害虫と天敵の関係(桐谷圭治)と弱者の共存機構(安田弘法)の2つが収められている。

本書の特徴として、著者の年齢幅が非常に広いことがある。上はこの2月に逝去された桐谷氏(90歳)、下は36歳と半世紀以上に及ぶ。この広い年齢幅は、昆虫の群集生態学に重要な貢献をした研究者を幅広く選ぶという編者の狙いでもあっただろう。さらに、群集生態学の主要なテーマであるニッチ分割、捕食・被食、競争、共生、外来種、多種共存機構を正面から扱っている研究に焦点が当てられている。個別の内容について詳しく述べる紙幅はないので、全体的な印象について述べたい。

本書で紹介される研究の多くでは、はじめに立てた仮説がかならずしもうまく実証できずに、試行錯誤を繰り返しながら事実に向ってゆく。そして、試行錯誤を繰り返す研究の方が面白いのだ。仮説は、きれいに実証されてしまえば、あとは細部を詰めることが残されることになる。しかし、ある段階での解決がさらに次の謎をもたらし、それを解決する過程で当初は予想もしなかった新しい世界が開ける場合がある。そういう、二重底、三重底の解明がうまくゆくと、ある事象の生態的意義が大きな枠組みの中で統一的に理解できることがある。そういう謎解きの楽しみを味わってほしい。

次の特徴は、著者の説明のしかたの違いである。対象とする読者は、生物好きの少年少女なので、彼らになるべく分かりやすいように、大きな筋道が分かるような簡

明な説明が一方にあり、それとは対照的に研究の全容について複雑さをなるべく省略せずに伝えようという「こども扱いをしない」説明の仕方がある。どちらにも、それぞれ一長一短があるが、著者の研究に対する哲学の違いも感じられた。もう一つ印象的だったのは、過去に行われたそれ自体は記載的な研究が、新たな観点から光をあてられ、重要な証拠となる場合があることだ。たとえば、研究対象の昆虫が、外来雑草が侵入した過去の時点でその外来雑草を利用していたかどうかは、タイムマシンがない限り知ることはできない。それにもかかわらず知ることができたのは、たまたま過去の研究があったがゆえであった。その研究自体は、単に食草利用を調べただけの平凡な研究であったかもしれない。しかし、それがのちに重要な意味を持つ結果となったのだ。よく似たことを、高名で自由奔放な言動で知られる進化生物学者、ロバート・トリヴァースが自伝の中で書いていたことを思い出した。彼によれば、事実そのもののための記載は、

特定の仮説検証のためでないがゆえに、特有のバイアスをまねがれるという美点をもつ。そしてその美点が新たな仮説の検証に役立つのだ。トリヴァースのような創意あふれるアイデアを産み続けてきた研究者が、事実のために事実を愛する記載者を讃えることは、科学の協調的な側面を輝かせる。

最後に、著者の一人である故桐谷圭治氏の言葉とともに、同年代の二人の偉大な生態学者、故伊藤嘉昭氏と故巖俊一氏の言葉を紹介しておこう。順に、「総合防除とは害虫をただの虫にすることである」、「もっとも基礎的なことが、もっとも役にたつ」、そして「生態学のよいところは、研究を通じて自らの自然観を鍛えることができるところだ」である。本書には、編著者たちの記述を通じて、過去の偉大な生態学者の言葉が通奏低音のように流れているのが感じられた。

(滋賀県立大学環境科学部 西田隆義)

一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長） 湯本 貴和 2020.3 ～ 2022.3
業務執行理事
（副会長・次期会長候補）

宮下 直 2020.3 ～ 2022.3
（専務理事） 永松 大 2019.3 ～ 2021.3
（庶務担当） 三木 健 2019.3 ～ 2021.3
（会計担当） 黒川 紘子 2019.3 ～ 2021.3
（広報担当） 中川弥智子 2020.3 ～ 2022.3
（出版担当） 久米 篤 2020.3 ～ 2022.3
（男女共同参画 / キャリア支援担当）
木村 恵 2020.3 ～ 2022.3

理事（2020.3 ～ 2022.3）

内海 俊介 鏡味 麻衣子
北島 薫 近藤 倫生
辻 和希 東樹 宏和
中野 伸一 西廣 淳
宮竹 貴久 村岡 裕由
吉田 丈人 和田 直也

監事

陀安 一郎 2019.3 ～ 2021.3
齊藤 隆 2020.3 ～ 2022.3

代議員（2019.12 ～ 2021.12）

全国代議員 赤坂 宗光 丑丸 敦史
内海 俊介 鏡味 麻衣子
粕谷 英一 岸田 治
黒川 紘子 近藤 倫生
瀧本 岳 辻 和希
東樹 宏和 中野 伸一
西廣 淳 日浦 勉
吉田 丈人
地区代議員 小泉 逸郎（北海道） 彦坂 幸毅（東北）
鈴木 牧（関東） 石井 博（中部）
北島 薫（近畿）
宮竹 貴久（中国・四国）
細川 貴弘（九州）

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief 陶山 佳久
Deputy Editor-in-Chief 鈴木準一郎
Associate Editors
in-Chief 飯島 勇人 鏡味麻衣子
木庭 啓介 小林 真
小杉 緑子 松浦 健二
宮澤 真一 長田 典之
瀧本 岳 玉木 一郎
江成 広斗 兵頭不二夫
牧野 渡 大澤 剛士
Ming Dong Bo Li

Zhijun Ma
Handling Editors

深澤 圭太
半場 祐子
日浦 勉
今井 伸夫
石川 尚人
梶 光一
北村 俊平
工藤 岳
松井 一彰
松崎慎一郎
中路 達郎
西村 欣也
岡部貴美子
大園 享司
阪口 翔太
佐藤 一憲
山尾 僚
安田 仁奈
高田まゆら
Min Cao
Franck Courchamp
Guillaume Echevarria
Yunting Fang
Raghavendra Gadagkar
Brenden Holland
David W. Inouye
Mathew A. Leibold
Jeremy T. Lundholm
Ariel Noveplansky
Jeremy J. Piggott
Sergio R. Roiloa
Bo Song
Janne Sundell
Arndt Telschow
Jae Chun Choe

Stephanie A. Bohlman

福井 大
平田 竜一
市栄 智明
稲垣 善之
角谷 拓
上條 隆志
小林 和也
工藤 洋
松尾奈緒子
村上 正志
仲澤 剛史
大橋 瑞江
中村 誠宏
斎藤 琢
佐々木雄大
佐藤 拓哉
横川 太一
飯田 碧
藤井 佐織
Ping Xie
Stuart J Davies
Jingyun Fang
Jan Frouz
Rhett D. Harrison
Sun-Kee Hong
Eun-Shik Kim
Andrew M. Lohrer
Tsewang Namgail
Pil Sun Park
Nishanta Rajakaruna
Stephen D. Sebestyen
E. Ashley Steel
Cindy Q. Tang
Edward Vargo
Hoi Sen Yong

日本生態学会誌編集委員会（2020.1 ～ 2022.12）

編集委員長 永光 輝義
編集幹事 安房田智司
編集委員 相場慎一郎
島野 光司
村岡 裕由
高田 宜武
土田 浩治
東樹 宏和
和穎 朗太
保原 達
松林 圭
山浦 悠一
嶺田 拓也
白川 勝信
名波 哲
伊東 明
小林 剛
三宅 崇
箱山 洋
村上 貴弘
佐久間大輔
笠原 玉青
大澤 剛士
立木 佑弥
草刈 秀紀
富田 涼都

保全生態学研究編集委員会 (2018.1 ~ 2020.12)

編集委員長	小池 文人	
編集幹事	西廣 淳	佐々木雄大
編集委員	天野 達也	石濱 史子
	市野川桃子	岩井 紀子
	丑丸 敦史	岡野 隆宏
	金子 信博	河口 洋一
	岸本 康譽	北村 亘
	楠本 良延	小池 伸介
	五箇 公一	今藤 夏子
	佐伯いく代	鈴木 覚
	曾我 昌史	高田まゆら
	立原 一憲	露崎 史朗
	戸田 光彦	森田健太郎
	横溝 裕行	

自然保護専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長	和田 直也：中部
副委員長	奥山 雄大：関東
	大久保奈弥：海洋
幹事	神山 智美：環境法
地区選出委員	

露崎 史朗：北海道
長谷川 功：北海道
星崎 和彦：東北
黒沢 高秀：東北
亘 悠哉：関東
増田 理子：中部
野間 直彦：近畿
中井 克樹：近畿
岡 浩平：中国・四国
伊谷 行：中国・四国
久保田康裕：九州
高嶋 敦史：九州
平田 令子：九州
増沢 武弘：高山・亜高山
竹門 康弘：陸水
加藤 真：海洋
清水 善和：島嶼
久保田康裕：熱帯・亜熱帯
横畑 泰志：寄生生物
阿部 晴恵：遺伝子
竹中 千里：大気汚染
常田 邦彦：鳥獣管理
矢原 徹一：海外渉外
安溪 遊地：エネルギー問題
角野 康郎：湿地
水谷 瑞希：MAB
五箇 公一：環境行政（外来種）
吉田 正人：環境政策（自然公園／種の保存法）
村上 興正：環境政策（外来種）

将来計画専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長	佐竹 暁子	
副委員長	酒井 章子	
	辻 和希	巖佐 庸
	粕谷 英一	石井励一郎
	田中 健太	小泉 逸郎
	立木 佑弥	三木 健
	北島 薫	森長 真一
	塩尻 かおり	彦坂 幸毅
	黒川 紘子	土居 秀幸
	山道 真人	大串 隆之
	佐藤 拓哉	石川 麻乃
	鈴木 貴俊	

生態学教育専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長	畑田 彩	
副委員長	中田 兼介	
非教育学部系枠：		
	嶋田 正和	西脇 亜也
教育学部系枠：		
	平山 大輔	丑丸 敦史
	三宅 崇	中井 咲織
高校教員枠	宮田 理恵	佐賀 達矢
博物館枠	中村（澤邊）久美子	小林 誠

大規模長期生態学専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長	大手 信人	
	石原 正恵	伊東 明
	内海 俊介	黒川 紘子
	木庭 啓介	中野 伸一
	中村 誠宏	松崎慎一郎
	村岡 裕由	

生態系管理専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長	西廣 淳	
副委員長	鎌田 磨人	
幹事	橋本 佳延：キャパシティビルディング部会担当	
	西田 貴明：調査・提言部会担当	
キャパシティビルディング部会：		
	山下 慎吾	白川 勝信
	矢原 徹一	大脇 淳
	赤石 大輔	伊藤 浩二
	上野 裕介	上崎 聰敏
調査・提言部会：		
	高村 典子	松田 裕之
	中村 太士	岩崎 雄一
	大澤 隆文	小笠原奨悟
	高川 晋一	佐々木章晴
	中静 透	古田 尚也
	吉田 丈人	

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

内海 俊介	岡部貴美子
三木 健	佐藤 拓哉

辻 和希	半場 祐子	英語口頭発表部会	
大会企画委員会		藤井 佐織	深澤 遊
委員長 幸田 良介		山道 真人	天野 達也
副委員長 高橋 佑磨		高須賀圭三	杉浦 大輔
運営部会 酒井陽一郎	潮 雅之	照井 慧	青柳 亮太
堤田 成政	高野（竹中） 宏平	宇野 裕美	森井 悠太
京極 大助	宇野 裕美	入谷 亮介	辰巳 晋一
入谷 亮介	立木 佑弥		
田邊 晶史	三村真紀子	野外安全管理委員会	
野下 浩司	直江 将司	委員長 石原 道博	2020.4 ～ 2022.3
シンポジウム部会		鈴木準一郎	2020.4 ～ 2022.3
吉村真由美	川西 基博	粕谷 英一	2020.4 ～ 2022.3
阿部 真人	磯村 尚子	北村 俊平	2020.4 ～ 2022.3
門脇 浩明	池川 雄亮	大館 智志	2019.4 ～ 2021.3
太田 民久	吉田 智弘	飯島 明子	2019.4 ～ 2021.3
児島 庸介	小林 知里	奥田 昇	2019.4 ～ 2021.3
小山明日香	畑 憲治		
ポスター部会		キャリア支援専門委員会（2020.4 ～ 2022.3）	
高橋 一男	吉竹 晋平	委員長 上野 裕介	
清水 加耶	比嘉 基紀	副委員長 木村 恵（男女共同参画）	
澤田 佳宏	長田 典之	鈴木 牧（キャリア支援）	
土岐和多瑠	鍋嶋 絵里	河内 香織	小山 耕平
江川 知花	中西 希	鈴木 智之	曾我 昌史
服部 充	山尾 僚	西田 貴明	沼田 真也
細川 貴弘	長谷川成明	水野 晃子	森田健太郎
高校生ポスター部会		高田まゆら	成田 あゆ
高木 俊	中浜 直之	高野（竹中） 宏平	宮脇 成生
中村 圭司	片山 直樹	オブザーバー	
望月 昂	城野 哲平	可知 直毅	黒瀬奈緒子
宮崎 佑介	佐賀 達矢	塩尻かおり	富田 基史
櫻井 麗賀	栗山 武夫	半場 祐子	三宅 恵子
三宅 崇	村瀬 潤	別宮（坂田） 有紀子	荒木希和子
立木 佑弥	佐藤 拓哉	中坪 孝之	宮下 直
中原 亨			
発表編成部会			
兵藤不二夫	榎木 勉		
高見 泰興	伊津野彩子		
小沼 順二	谷口 義則		
赤坂 卓美			

Center for Ecological Research NEWS



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2020年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2020年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

なお、新型コロナウイルスの影響により本稿に掲載されている予定については変更の可能性があります。ご了承ください。

1. プロジェクト

JST 戦略的創造研究推進事業 (CREST) (1件)、科学研究費助成事業による研究 (32件)、民間財団寄附金による研究 (10件) などが進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2020年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、1件の国際共同研究、10件の共同研究a、3件のワークショップ、1件の研究集会を採択した。研究集会とワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度 (第三金曜日) センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室 (会場への道順は、センターのホームページ参照) の予定である。なお、2020年5月のセミナーより、セミナーのWeb配信を随時行うことになった。詳細についてはセンターホームページをご覧ください (視聴には事前申込が必要)。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に2回 (7月、1月) 発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA関係ではDNA多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置 (元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置 (熱分解型元素分析計)、GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench II (自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、元素分析計、GC/Cを装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計2台が稼働している。

琵琶湖観測船: 高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地 (下阪本) に係留されている。

シンバイオトロン: 陸域モジュール、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園: センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CERの森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：木庭

観測船関係：合田

シンバイオトロン関係：高林

実験圃場林園関係：酒井

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

2020 年度 国際共同研究・共同研究 a・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧			
申請者	所 属	申込内容	研 究 課 題
Antony Dodd	Dept. Cell & Developmental Biology, John Innes Centre, Norwich, UK	国際共同研究	The adaptive significance of circadian gating under natural conditions across the seasons
Antony Dodd	Dept. Cell & Developmental Biology, John Innes Centre, Norwich, UK	共同研究 a	The adaptive significance of circadian gating under natural conditions across the seasons
久本 洋子	東京大学大学院 農学生命科学研究科附属演習林千葉演習林	共同研究 a	安定同位体トレーサーを用いたタケジェネット断片における資源分配
高巢 裕之	長崎大学 総合生産科学域	共同研究 a	筑後川感潮域において大規模な窒素生成を駆動する生物化学的過程の解明
清水（稲継）理恵	Evolutionary and Ecological Genomics, Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	異質倍体植物の遺伝子発現パターンと気象情報からの表現型モデリング
榮村 奈緒子	鹿児島大学 農学部	共同研究 a	クサトヘラの種子散布に関わる果実二型の原因遺伝子のスクリーニング
尾坂 兼一	滋賀県立大学 環境科学部	共同研究 a	POR 酸化 - 脱窒菌法による微量粒子態窒素安定同位体比測定法の開発
荒木 希和子	立命館大学 生命科学部	共同研究 a	クローン性植物におけるエピジェネティック修飾の継承とその適応的意義
三田村 啓理	京都大学 フィールド科学教育研究センター	共同研究 a	微量測定手法による脊椎骨の安定同位体比を用いたメコンオオナマズの食性解析
富永 修	福井県立大学 海洋生物資源学部	共同研究 a	硝酸イオンの高精度同位体測定手法を用いた沿岸海域の生物生産・物質循環研究
Sung Yik Hei	Lingnan University	共同研究 a	Assessing Stream food webs across a latitudinal gradient
中野 伸一	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 木曽川
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2020
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2020
山中 裕樹	龍谷大学 理工学部	研究集会	環境 DNA・環境 RNA 研究の新たな挑戦

センター関係者の動き

- 1) 総合地球環境学研究所より奥田昇が 4 月 1 日付で准教授として着任しました。
- 2) 研究員の本庄三恵が 4 月 1 日付で准教授として着任しました。
- 3) 特定准教授の程木義邦が 3 月 31 日に退職しました。
- 4) 中村慎崇・仲畑了・古川沙央里が 4 月 1 日付で研究員として採用されました。
- 5) 石川奏太が 2 月 1 日付で研究員として採用され、3 月 31 日に退職しました。
- 6) 研究員の河合清定が 3 月 31 日付で退職しました。
- 7) 研究員の辻祥子が 4 月 30 日付で退職しました。
- 8) 特定研究員の村中智明が 3 月 31 日付で退職しました。
- 9) 研究員の大西雄二が 3 月 31 日付で退職し、4 月 1 日付で学振特別研究員として採用されました。
- 10) ZHENG, Jinsen が 4 月 1 日付で学振外国人特別研究員として採用されました。
- 11) 学振特別研究員の岡野淳一が 3 月 31 日付で退職しました。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費 *	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500 円	○	○
正会員（学生）	4500 円	○	○
賛助会員	年会費 20000 円／22000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ・日本生態学会誌 | 正会員のみ有 |
| ・保全生態学研究 | 投稿権利は会員に限定されません |
| ・Ecological Research | 投稿権利は会員に限定されません |

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- | | |
|----------------------|-----------|
| ・Ecological Research | 8000 円 |
| ・日本生態学会誌 | 600 円 ** |
| ・保全生態学研究 | 2000 円 ** |

**非会員に向けた学会誌(冊子体)の定期購読料は、以下の年額となります。

- | | |
|----------|--------|
| ・日本生態学会誌 | 9,000円 |
| ・保全生態学研究 | 5,000円 |

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631